WASON
HQ
1154
J74+

July, 1899
No 491

明治三十二年七月十日

女學雜誌

第四百九拾壹號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百九十一號目次

◎社說
男女の關係
大學増設は總長を撰むにあり
航海舟餘波(四)
支那人雜居問題
◎家庭
夏野いろ〳〵(紫琴女)
(女學心理)笑の文學(二)無識庵
徳川家康が子孫の庭訓(石翁)
妻の不平(奥州白石の一婦人)
◎文藝
禮道幽旨
◎雜錄
鬼面百相(其八)靑柳有美
竹本素行を訪ふ(小川桃花)
農夫(中學生のため)(白水郎)
◎隨感
個々銘々の天使○大山獨燈、大谷磯潛○聖なる秘め事○大哲學者は學者にてあらじ○花よ蝶よ○
◎時事
加藤てう子逝く○松田道子
◎片々
◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾儕の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるゝものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓
	(內國無郵稅)	
	代金は惣じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事◎但し其節は惣て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事	
廣告料	一行(廿七字詰)一回	前金拾錢
	同 三回以上	一割引
	同 六回以上	二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は惣べて一割増にて計算せられたし	

明治三十二年六月廿四日印刷
明治三十二年六月廿五日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話本局十九番)

◎婦人科◉小兒科 專門 至誠醫院治療之趣旨

本邦婦女の特性として温柔靜肅を旨とし閨門深く垂れ籠めて猥りに人に接はらぬを良家の庭訓となすが故に男子とは席を同ふし交を交すをさへ道に缺くるものとし語るべき病症殊に子宮疾患の如きは醫に就くを羞ぢ厭ふが爲めに唯密かに心を痛め身を苦しめ終には人生の快樂を殺ぎ子孫の繁榮を遮ぎり天壽を天折するもの尠なからず豈嘆かはしき至ならずや 本院長も又是國風の間に人となり深く此弊を憂へ之を救ふの道もがなと慨然婦女の分として妄りに身を挺んで齊榮にして深邃なる醫學に志し研鑽多年その業を卒へ爾來又た數年東西の諸大家に就きて特に婦人科を研究して刀圭に從事する所以のものは己れ女性に生れたるの天職たるを信じて泥み近づき易く打ち解け語らひ易き同胞姉妹の疾患に對しては能く貞淑の美德を傷けず愼重懇切に治療し得るは竊かに諸大家に讓らざるの特技あるを期す又小兒科にありては第一の慈母として狎れ懷き易きが故に幼兒をして畏ぢ慄れ失聲啼泣せしむるが如きことなく安靜に診療を施し得るを以て誤診姑息等の弊なしとす是れ本院長が起ちて世の同胞に告ぐる所以なり

院長女醫鷲山彌生診察 本院午前 分院午後

本院麴町區飯田町四丁目九番地
分院京橋區宗十郎町一番地
至誠醫院

女學雜誌

明治三十二年七月十日發兌

第四百九拾一號

社説

男女の關係

●男女の關係について、色々の議論があるが、吾輩から見ると、夫は「關係の議論」ではない、『關係の程度の議論』である。男女の關係は、古往今來、一徹で、昔しから、チヤンと定まつて居り、恐らく將來と雖ども、動かぬ者であらうと信じて居る。即わち、男女の關係は、陰陽、內外の關係で、その關係には決して變わりがあるまい。たゞ其の關係の程度に付て、何處迄が內で、何處迄が外、何が陰で、何が陽であるかと云ふ事實の上に意見があるのみで、其の相ひ關する情理には、決して影響が無い筈と思つて居る。

●男に比べれば、女はどふしても陰性である。其分擔の仕事は、必らずや內助である。たゞ此の陰と云ひ、內と云ふものに、時、所、位に隨がつて、事實上の相違を來す。日輪を太陽とすれば、月は陰であるが、月の光に螢を比べれば、月は陽になつて、螢が陰となる。然し、螢の光に、鬼火を比べれば、螢火も亦た陽となるのである。大木の陰に立つ灌木は、大木に對しては陰性であるが、其の灌木の下の小草から見れば、灌木は寧ろ陽であらふ。內と外と云ふのも亦た此の通りで、只だ比較上の言葉であるから、世界に對しては、日本は內であるが、日本國に對すれば、家は其の內で、家丈けで言ふて見れば、玄關は外で、奧が內である。所ろで、昔し女は奧樣と言つて、其の奧にばかり居つて、玄關と云ふ外部にすら決して顏を出さなかつた。其の頃の所謂ゆる「內」は即わち閨門の內であるから、其の內助を爲すものと定まつたる女である以上は、いつ迄も〳〵矢張り、其內より外へは出られぬと言つては、實に不道理千万の事ではない乎。男が出てゆ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

くべき外部の區域が廣まれば廣まるほど、女が附いて出る區域も亦た廣まる筈で、即はち內助を主とする女の「內」なる區域が廣ろくなる譯、所謂る內界の擴張であらふ。

◉ソレデ、維新后の事實に徵して見ると、直ぐと分る。明六社が出來た明治六年より八年にかけては、西洋の文物を盛んに入れよふと云ふ輿論の挽回して、其の滿潮に達した時機である。夫から十年立つて、明治十七八年が、再たび、西洋流を入れよふと云ふ第二の時機、夫から又十年立つて、明治二十七八年が、世界的にならうと云ふ第三の時機である。總べて、世の中の勢は、十年一と昔しで、十年目に一回轉するからの事で、初めが滿潮で、后が干潮。一進一退で、流行遷轉極まりなきうちに一の極まりがあるのである。所ろが社會の大躰、即はち男子に關する方面の事が、一段擴張して、外へ向ふて一步進めば、之に引續いて女の方面の事が亦一步進むと、影の形に添ふが如くで、實に爭そはれぬものである。因て、前に述べた十年一期の事を主も男子の方面として考へて御覽なさい、引續いて女の方面が伴隨して擴張した事實が直ぐに分る。即はち、女に關係した議論が勃興して、女子敎育の聲が俄かに盛になつたのが、明治九年、十年。同じく十九年、二十年。同じく、二十九年、三十年で、男子の方面が擴張するにつれて、女子の方面も亦擴張される。擴張されればこそ、不足を感じて其敎育を必要とするやうになつて來るのである。此に於て、內外陰陽の關係が直ぐと分る。外なるものが外に向ふと一步なれば、內なるものの內が亦た外に向ふと一步で、追々と內界の區域が擴がつて行くのである。

◉シテ見れば、女子の本領を內助にありとするとは、昔しも今も決して變らぬことであるが、其の內助の區域が、時代と同もに進步するので、隨がつて、敎育の區域も亦た擴がるのである。此の程度こそ議論して決すべきことであるが、抑そも男女の關係に付ての情理に至つては、何も議論すべきことでない。チヤンときまり切つて居るのである。

◉たゞ此の「內」なるものに付いての意見が、人によつて樣々で、或る人は、其の相當より以上に外部に突進する。或る人は、其の相當より以內に內部に引込んで居る。之からして、過激とか保守とか、西洋風とか、昔し風とか云ふ評も起るのであるが、夫は程度の話して、抑そも、主義方針などと云ふ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大問題ではない。尤とも、勢ほいから言ふと、十年一期の間に於て、初は、其相當以上に外に引張り出し、後は、其相當以下に引込めると云ふので、之が爲め、生意氣過るとか、引込過るとか云ふ樣々の議論が起るのである。

◉貝原翁の女大學なども、其頃に在ては、女權論の主張で、即わち、やゝ進步的の意見であつたが、年が進むに拘らず依然として之に拘泥し、貝原翁時代に定めた所云ゆる「內」なる區域を、いつ迄も其まゝに仕樣としたから、後には束縛壓制の姿になつて、即わち女の進步を害するほどとなつたが、此の進步を害するほどとなつたと言ふのが、即わち進步した證據である。今度の福澤先生の新女大學なども、矢張り同然で、遠からず、あれではまだ後れて居ると言はれるほどになる。即わち、內助の內面が更に大いに擴張されるに違いない。今の日本の如く、ドシ〳〵外に向ふて進步して、男の擔當する外部が廣ろくなればなるほど、女の擔當する內部も亦大いに擴張される筈で、何も不思議はないのである。

◉左れば、男女の關係は、先天的に定まつて居る。其の關係を事實に現わして、各自分擔の區域を定め、所學の科目を撰ぶなどは、所云ゆる程度の論で、之は時所位につれて活斷せねばならぬ活問題である。コウ二つに分けて考へて觀たらば、當今何んだか八釜しく論じて切りに疑問して居る事柄は、釋然として直ぐ氷解するとであろふと信ずる。

大學增設 は總長を撰むにあり

◉大學增設の計畫は、美事には相違ないが、もし其の設計に付いて大度量が無い程ならば、寧ろ「今の高等學校を直ぐと大學にして、今の大學を大學院にした方が可い」と云ふ一種の冷評を反つて卓見とせねばならぬ。

◉大學を二つ以上とするの利益は、夫々に特色を持たせて、互いに競爭させ、大いに人才を發輝するにある。然るに、初めから第二流の敎授を送つて、最初より首府の大學に一段下つたものとするやうでは、新たに造つた甲斐がないのみならず、寧ろ害である。

◉然し、競爭するほどの敎授其人が無いのを如何んせんと云ふものもあろふが、夫はうぬぼれ極まる話しだ。今の大學は

學閥で、少し氣慨のある天才は遠ざけて用いぬようにして居る。たとひ用いるとしても、いつ迄も下に追ひ使つて、其の自由なる研究、自由なる發表を妨害して居る。

●夫故、もし新たに大學を開くとならば、此頃、欝勃たる青年敎授や、今まで遠ざけられて居る學者連中を用いるやうにして、主府の大學に反抗させるが善い。左すれば、學文の競爭、學風の發揮、文才の活動で、甚はだ面白いとが出來る。苟しくも、二以上の大學を設けんとするならば、此位いの經驗がなくば、面白くもなんとも無い。

●幸わい、大學總長を任命するは、文部大臣の權內だから、東京の大學に構わず、寧ろ其の惡まれもの位いを先づ擧るが善い。決して東京の大學連に相談などしては成らぬ。先づ、總理一人に適宜の人物を擧れば、自然と其の流亞の人才が寄つて來るからと言ふ論で、旣に京都大學の出來る比には、是非、三宅雪嶺を用ゆるが善いと云ふ社論であつた。多少運動しても見たが、當時の在局者は、トント、其樣な面白い見識は無つたのである。

●之れから、九州と東北とに、一つ宛、設けると云ふ積りだ相なが、東北と九州とは、倘更ら、京都と違つた面白いとが出來る。大臣にして大局を大觀する上からは、ドウカ、大躰に於ける數十年の學風に着目して、たゞ大學の數を殖やした丈けを美事とされぬやうにありたい。もし然らば、たとい新大學の設計が不十分で、器具などが、不完全でも、其上に活動する一種の元氣が充溢して、必らず一成効を擧るに相違ない。然らずして、主府の大學の差圖を受けて、其のおあまりを頂戴し、之に加えて經費も、器具も不足であるやうでは、開かぬサキから、意氣消沈で、迚も新大學を起した丈の甲斐はあるまい。コンナ所から、つまらない卒業生が出て、矢張り大學出だなどと言つては、いよ〳〵大學の價値を下げる斗りで、即わち眞の大學の擴張に妨害を與へるものだ。斷じて、文運の隆盛に助けするものではあるまい。

●凡そ學校を新たに開く程の時に、其の敎授から造るなどの考へでは迚もダメダ。造らずとも善い、用いさへすれば善い。大學閥以外に欝屈する幾多の學者が、所々にギラ〳〵して居る。今更らアワテテ敎授製造などの小策から着手する樣では、最早やダメダ。

續海舟餘波　（四）

◎海舟先生の癇癪と云へば、昔しから名高いもので、夫は實にひどいものであつた相だ。尤とも、追々に和らいだのであらうが、明治十年前后に至る迄では、まだ〱恐ろしい氣焔であつた相だ。ドンナ時でも、誰に對しても、一向、お搆ひなく、殆んど狂氣同樣の癇癪で、霹靂、天地を驚ろかす樣な大叱咤もあれば、又、六日も七日も、一言も言はずに、ムットして居らるゝヿなども度々有つた相な。

◎長州へ解兵の談判に行かれる時、お伴は尺振八氏の兄弟お一人であつた相なが、播州の邊とかで、駕屋が遲いとか言つて、癇癪を起し、『己はモウ歸る』と言つて、サッサと元の道へ戻られた相な。又、咸臨丸に乘つて初めて亞米利加に航海される時でも、何か大不平で、癇癪ばかし起して居られた相だが、甚はだしきは、太平洋の眞中ごろで、『サー、己はモー一人で歸るから、バッテーラを卸せッ』と言つて承知されなかつた相だが、家庭に於ても、斷えず此の樣なヿがあつて、一と度び癇癪が起ると、一週間位は、誰もお傍に寄れぬ程であつた相ナ。

◎之は、本來癇癖がある故でもあらふが、內外の事情、錯綜して、迚も尋常手段で、まとまらぬ故もあり、又、横着な惡黨などを餘計に取扱かはれる中に、自づからコンナ風になられたと云ふ譯もあらふ。自から制すへきは制して、素より之が爲めに大事を誤まるようなヿの無つたは勿論であるが、左なき時は、我儘一杯で、自然の惡癖をも搆はずサラケ出されたらしい。英雄のクセと云つて宜しいのである。

◎然し、八あたりに當るとは、先生の思慮の中の一つで、必らずしも癖とばかり言はれない樣である。『維新の頃は、無暗に當つてやつたが、今から考へて見ると、どうも若かつたよ。いくら當つても、老中なとには何も出來ない者だと云ふヿが分らなかつたので、トンダ、罪をつくつたのサ』と言はれたヿもあり、又、『人には欠陷がなければ成らぬ、ヤイ〱其の事ばかり責められて居るうちに、外の事が出來るものだ』と言はれたヿもある。英雄の行爲を測るに、一も二も、思慮から出た策の樣に思ふは、大誤謬の初めであるが、然し、英雄が自から制せずして我儘放題に爲て居る惡癖に付ては、多少

の勘辨がある筈で、左なくば、區々たる癖位ひのことを自から禁止するに、何の雜作が入るものか。先生の大癇癪は、一は天性で、一は事情に激されたのであるが、之を自から制しよふとされなかつたのには、多少譯があつたと言ふても差支へないことである。

◎ソレデ、明治十年后は、段々に沈まつて、晩年に至ては、實に生れ變はつた樣になられたのだ相ナ。前日の事を知つて居るものが、晩年の海舟先生を見ると、丸るで、佛樣になられた樣だと言つた。夫でさへ、時々大破裂をされることがあるが、其時の見幕は、鬼でも逃げ出すだらふと思はれたから、昔し一層激烈であつた頃の有樣は、抑そもドンナであつたらふかと、明らかに想像された程である。

◎然し、一躰は、沈鬱幽玄の事を好かれて、決して、騷々しい方の質ではない。所謂ゆる後藤伯の樣な、華やかな、賑やかな、お祭が好きなやうな質とは丸るで違つて居られた。維新后二十餘年間引籠んで居られた海舟書屋などは、陰氣極まる部屋で、迚も通常の人が一週間と辛棒して居ることの出來ぬ所ろであつた。晩年に移られたる例の清閑なる部屋でも、光

線の餘計に當るのを嫌つて、いつも陰氣に鬱陶しいやうに仕て居られた。花でも、華美なのがお嫌ひで、蘭、萩、タンポポ、忍ぶ草の類を好まれ、草も餘り取ることはお嫌ひで、木も茂る方がお好で、決して枝を御させると云ふことは爲さらなかつた。牽牛花は嫌ひで、忍ぶ草を愛して、曾て詠まれた歌に、

美くしき花さかぬ身はなかなかに、
靜かに世をば忍ぶ草かな。

一種、悲哀にして幽玄なる趣味が、彷髴として目の前に顯然たることを覺える。

支那人雜居問題

◎内地雜居の議論と云へば、只だ西洋人の事ばかりであつたが、彌よ近々雜居するとなれば、俄かに支那人の事に心配する樣になつた。

◎支那人にも内地雜居を許すべきや否やと云ふことに付て、色々の議論が見えるが、表面の言ひ前はホンノ餘計の事で、實際は只だ勞働問題に關しての心配である。

●支那人の不潔なとを楯にして論ずるものもあるが、夫は理窟にあわんとである。不潔で悪るければ、いくらでも取締様がある。今でさへ、隨分八釜しく巡査が叱つてあるくではないか。日本人同樣に扱かつて、其の衞生を嚴しく取締れば、別に憂ふべき筋は無い筈である。

●必竟は、「支那人がドシ〳〵渡つて來て、色々の事に廉直に働らき、遠慮なく錢をもふけて、悉とく本國に持つて行つて仕舞ふであらふ。之が爲めに、日本の勞働者が競爭に負けて大困難をするに違いない、金も知らぬ間に澤山取られて仕舞ふに相違ない」と云ふ所ろから、心配が初まつたのである。

●成程、心配には違いないが、コンナ心配は如何に處置したら善いのであるか。之を心配して、その爲めに支那人を遠ざけ、いつ迄も、かゝる競爭者を内地に入れぬやうに仕て置くのが、つまり國家の益である乎。もしも、之を遠ざけたからと言つて、そのまゝ支那人が地球の表面から無なつて仕舞ふものであらば、マヅ將來いつ迄も競爭の心配が無なつたと云ふものであるが、無論ソンナ馬鹿氣たともなく、只だ一時之を遠ざけたと云ふ丈けで、詰りは之と競爭をせねば成らぬのである。夫ならば、いつ之と競爭して、必らず勝てると云ふやうになるのであるかと言へば、この先、このまゝにして居たからとて、遂に見込の立ぬとである。むしろ、支那人と競爭するとは、國民があまり文明流にならぬ内が善い。文明流にかぶれて、奢りが高じ、衞生とか何とか云ふとを餘り言ふやうになれば、彌よ其の競爭に負けるやうになるのである。即わち、先に行けばゆくほど、一種の心配は殖える譯であるが、抑そも論者は、支那人の雜居を永久禁ずるつもりであるのか、どうか。第一、其の見込が聞たいものである。

●支那人が餘計、入り込んで來るとすれば、車引だの、立ン坊だの、人夫仕事師などは、迚も競爭が出來る筈はない。今の此等の日本人の如く、なまけ半分にブラ〳〵して、而も宵越の金を持たぬやうな馬鹿なとを仕て居る人間が、どふして支那人に競爭するとが出來るものか。夫は分りきつたとである。然し、夫等を心配して、支那人の内地雜居を許さぬとは、あまり、近眼で、見識の狹い論ではないか。

●昔しの日本の政治家は、コンナ、ケチなもので無つたよふである。成べく多く支那人を招いて、或は移住歸化せしめ、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

或は來て出稼をせしめ、或は參詣の爲め、雇はれの爲め、遊山の爲めに、續々多く渡來するやうな趨勢を立てたものである。其の政治上の變革があつて、國家興亡の移りかはりなどがある際には、就中、利用して、多く招いたもので、決して支那人の雜居をどうするなぞと言つて議論したものは無かつた。然るに、世界的の日本とか何んとか言ひかけた日本國が、今日に方つて、初めて支那人の渡來に禁制を置うとすると言ふのは、ちと調子外れの事である。

●諺に「可愛ゆい子に旅をさせる」と云ふことがある。塩踏をして、荒い風に當らねば、人間となれぬ。一個人でも、一國民でも同じことである。支那人の勤勉、儉約を恐れて、之を遠ざけるなどと云ふことは、國家を大いに開發して、國民を大に善導しやうとするものの抱負ではない。試ろみに、維新當初の精神に立反つて考がへたらば、直きに分ることで、昔しの我に對して恥かしいことであらふ。

●支那人の下等なものが餘計に來る程とならねば、其の上等のものも多く來ない。ドウセ、來るうちには、善いものも、惡るいものもあらふが、ソンナ事は頓着すべきでない。國家の胃袋さへ丈夫にして置けば、之を消化して、大躰の利益とすることは、決して六かしいことではあるまい。ドシ〳〵支那人を來させて、其の惡るい風は、日本風で導びいて善くならせ、又、其の長所は、我國にも流行させて、眞に亞細亞に於ける同人種、隣邦友交の間柄となしたいものである。ツマリ、支那にまで出かけてゆくほどでないか。あちらから當方に來るのが、何を憂ふる乎。いくら澤山に來ても、支那に居る支那人ほどには來まい。然るに、支那まで出掛けて、其中に雜居したいと言つてる日本人が、向ふからポツ〳〵來たからとて、夫に恐れるなどと云ふことがあるものか。議論も何も入らぬ。實に馬鹿〳〵しい掛念である。

卒都婆小町賛　　芭蕉

あふたふと〳〵蓑も尊し笠も尊としいつれの人かかたり傳へいかなる人か寫しとゝめて千歳はまほろし今爰に現す其かたちある時はたましひも又爰にあらん蓑も尊し笠もたふとし

たふとさや雪ふらぬ日も蓑と笠

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家庭

夏野のくさ〴〵

紫琴女

一 世も人もいや〳〵と思ひ過せば、先何よりも我身が頓といやになるものなり。いやになつての捨所なき、身は山に入るとても、淺間しの影ぼうしの、ついて來る間は、いやといふだけ、野暮の沙汰なり。されば古人も、世を捨てゝ山に入る人、山にてもと、心の外の遁世所なき、消息は漏らしける。胸三寸の遁世所普請出來ての其上は。……往く所として、何處世の隱れ家にあらざらむ。誂るはざとして、何かは經文ならざらむ。さるを頑なる心もて、世に容れられむと、思へばこそあれ、山に避けむの我儘も起き。世と人を、胸の器に收めては、避くるにしてからが、何處へ引越やうもなき身軆なり。古來衆生を伴ふての引越を思ひ立ち玉ひつる方二人あり。基督釋迦、說玉ふ所、御旨おの〳〵異なる所ありとはいへ。一人の重荷を衆生の重荷には思ひ替へて、現世にあきたらぬ人の心を、他界にと、運ばしめ玉ひしものなる可し、厭世も同じくは、救世の大慈大悲に、大轉化したきものにこそ。

二 惟我獨尊、人を子供と思ひては堪忍もいと養ひ易き德なる可し、我を子供の、人を大人と看做しては、嬉しきより、腹立しき事、口惜しき事、情なき事までづは多かるめる。さあれこゝろ行ひ、自ら大人と許す可くもあらぬ身もて、人を子供と恕せむには、あたら堪忍も傲慢とや、人の憎しみを惹く種子なる可し。さればこそあれ、自他の外なる赫々の天意にしも信賴して、子供同士の爭ひは、かたみに裁判かねを以て德とすと、古大聖は宣ひけらし。扨は堪忍といふも、踩め斷ずる所あるに似て、穩しからぬ言の葉なりなど、思へば思ふ心にも、肝癪虫の寄生を免れぬぞ、口惜しけれと獨語つ、こも亦例の虫がいはするわざか、はつかし。

三 境遇は動物の性格をも生むものなりけらし。我家の拾ひ犬に、おくろ四郎助の二匹あり。おくろは、一年を先だちての拾子にて、四郎助は、後れて來し迷ひ兒なり。何れ望みて飼ひしものにはあらねど、宿世あればぞ、我家の軒に、捨られ、さまよひ來りしものをとて育て上げつ。二年といひ

三年といふも、子飼にしあれば、響きおくろも忍ばしく、新らしきも亦憐れなり。肉一片を頒つにも、陳平が心して、平らかなれと力めしかど。おくろは先客年長の威を振ひ、四郎助を押し除けて、彼が分をも、掠むるが習ひなり。餘りの事に、夫よりは、おくろが居ぬ間を、四郎助に與ふる手筈に定めしかど、おくろはつゆ油斷せず。隙き間を計る我よりも、彼れが擧動は一層機敏に、夫れと忽ち、躍り掛つて、四郎助には、例の鼻をあかさせ勝なり。斯くても尚ほ四郎助の爲に計らむか、日に幾度の煩はしさを如何はせむ。まして、二匹は喧々、我は叱々、人と犬との、もろ脚鳴らすも疎ましければ、今はとて、四郎助が自衞に任せ置く事とはなしぬ。是一つには、四郎助が躰格、おくろには、遙か立勝りても成長せしかば、生存競爭の必要上、おのづから防禦の力を練り得べしと思へばなりき。さるを幾程なく、近所の噂は、四郎助を、スリ犬〳〵と罵る聲の、我耳にも傳はりぬ。笑止やおくろこそは、横道ものゝ、今も四郎助に憂き目を見すれ。四郎助は、至て〳〵温和しものゝ、爭ふ力も叶はじとや、おくろに讓るを我分に、鼻さへ向けずなりぬるは、實に犬の君子とも、いはゞいはるべきものを。人も犬も、世評はいつもかうぞとて、四郎助が頭を撫でゝも微笑しつ、いとゞ不憫は加はりけるに。まことは世間は我を欺かざりき。四郎助は、おくろに屈みし代りを伸べて、世間には、台所あらしの、スリ犬とはなり居しなり。さりとては我誤り、人の育ちもしかとぞ聞くを、犬なりとて、忽にもせし、我責は免れがたし。いで〳〵と心を籠て、夫よりは四郎助を、再び特別保護の下にしも立せにしかど。稚きより刻み習ひは容易く消えずや。おくろを見ては、忽ちに食を捨てゝ逃出つ。今はしも夜ばかりを我宿守る犬に、晝は四方を破落戸の、犬にもかくは境遇の、響きぬるものにやと。情けの眼もて迎ふるは、此邊りに、我一人ぞ彼が知己なりける。あはれ、横道のおくろも、馴れにし今は捨がたし。さりとて、おくろを放ちて單獨の、飼ひ方をしも試みずは、永遠に四郎助が性情の矯めらるゝ機なけむをと。五月雨頃のつれ〳〵を、犬の事にも思ひ寄するは、人の例もかくこその物好なれ。

四　我知れる婦人に、始めは心いと素直なるがありき。放蕩なる夫に配して、心と、ものゝある限りを捧げつ。いさゝか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

怨める氣色なきは、かの夜半ばにや君がと詠じけむ古姫の心にも似通ひてと、なへての袖は是に濡れたり。まして其が父母も始めの程こそ、氣強くも捨たれ。事々の憐れ迫りては、見るめをうみの、涙もこそあれ。男心ろのかばかりも定まらずは、末の寄る邊にも覺束なかる可し。捨小舟の身を、いつまで他所には漂よはせむ。いで幸ある礒邊にもと、娘が否むを、強ても、親の力に引分つ。此度こそはと、心ろして嫁付せければ、始めて處得し花の、匂ひさこそと思ひきや。いつの程にか、刺やうのもの生ひ出けむ。比らべては忠實なる男が心ろ盡しを、つゆ嬉しとは受け容れぬさまなり。ある可き事とも覺えねば、片腹痛さを、事に寄せて問ひ試ろみしに。其人は、ほゝと笑みて、輕く答へぬ。もの珍らしさの優しさに、うか〳〵乗りては、先立たぬ、後悔を先立せ、今は男に、赤心見せぬに極め侍りぬ。何れは是も、今の間を、泣かす積りの、笑はせられて、笑ふ時節は、いつなりし。轉ばぬさきの、杖は是ぞと誇り顔の、重ねて問ふは、うるさげなり。我はうき世の凄しき、嵐の正躰見たらむ心地。今も其人の、月光に冴えたる顔見ては、むかし春日の温暖なりし、面影のみぞ忍ばるゝ。例にひくも、大形に、氣の毒なれど。彼毒婦などいはるゝ類の、經歴を探らむには、必ずしも始めより、冷刻無情の婦人にはあらざりけらし。なみ〳〵よりは、幾倍を、情けも濃く、色濃き花の、開かぬ間を暴風に打たれて、情華微塵の、夫れかあらぬか。尙ほ適切なる例を求めて、考ふ可しとぞ思はる。

五　子といふもの知りてよりは、月にも花にも、是一ツを、詠めなる、我家の小富士。千度見て千度珍らしさの心には、人のなべて父樣にとばかり、我には顔の似ずといふさへもの足らず。人なき折を、我傍に引寄て。そなたは何とか思ひ玉ふ。生みしは我を、父樣にといふ内にも、此邊りの少しは似ずかと呼けば。につと笑うて、母樣にも似て居升ると、何處とは知らぬ、おぼろげを、はつきりいふもしほらしく。此所ぞといはむ心の印を、稚き人の頬の邊りには刻つ、共々鏡の前に立ち向ば。稚き人を似しと思ひし、我は昔の我にはあらで。思ひしよりも老けたる人の、亡き母上にこそいよゝ似たるが、微笑みても向ひ玉へるに、亡き姉上の面影さへ幻に、立ち添ひつ。胸はつと塞りて、稚き人の笑顔のみぞ、現には

残れる。あはれ御二方には。かゝる可愛きもの、見せまつらでも止みし、十年むかしの我はや。今は是にも、鏡は曇るものにも定りぬ。

徳川家康が子孫の庭訓

石翁

徳川二代將軍の子、兄は竹千代、弟は國松と云ひしが、將軍、國松に世を讓らんの氣色あり。家康之を知り、或る時に仰せあるは「竹千代、國松に久しく對面せず、兄弟同道にて參られ候樣にとの事」ゆゑ、二人同道にて伺ある。其時、家康は「竹千代殿、是へ〳〵」と仰せられ、上段の座へ請じられしに、竹千代、上段へ上らるゝに隨ひ、國松も續いて上ぼらんとし玉ふ時。家康は「勿躰なし、國はあれへ參り候へ」とて、つと下座に着かせ、やがて、餅出候とき、竹千代殿に參らせよと仰せられ、次に、國にもくわせよとなり。又、竹千代殿供の者呼候へとの事にて、御供の衆、次の間に伺候されし時、之へ參り候へとて、上段のきわ迄召れ、餅をはさみて、之をくはしませと仰せある。次に、國が供の者を呼候へとて、其の供の衆伺候し、御座の間へ入れ申さんとせし時、叱、勿躰なしとて、餅をはさみ、次の間へ投げ、之を食へとの上意なり。

將軍、此事を聞かれ、國松へ代を讓らんと思はるゝ由、御對面にて申上られし時、家康の答に、嫡子を捨てゝ庶子に家をつがすは、已むを得ざる時の事なり、且つ、惣領に家を讓りて若し其子不所存なる時は、父子惡名なし、又、惣領の所存によりて、讓らざる前に、惡事出來るあり、武田信虎の如くなり。たゞ父子の間は骨肉一躰の事を忘れず、大身などは、父子疎からざる樣に和睦して、心に叶はざる事あらば、能に諫め玉へ。大身なりとて、人をして言時は、違却出來て惡事と成る事は、三郎が事を思ひて斯く言ふぞ。予、三郎を棄てゝ、今に夜の目を寢ざる樣になるぞ。只だ、竹千代に、其方の身と同然なる人を撰み附けて、守り立させよ。然る時は、天下も榮え、世も太平なるべきぞ。誠とに、百年の苦樂の徒ら事、一生は風の前の燈、万事は春の夜の夢なれば、我身の榮華をもとめず、天下万民の爲を專らに思ひ、私慾惡道を遠

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ざけ、子孫長久のはかり事を成し玉へ。竹千代は、後には明將軍に成り玉ふべし、予が見る所これありと仰せられければ、將軍、ともかくも、上意畏まり奉りたりとて、其後、程を經て、又對面の時仰せらるゝには先日仰せ出され候竹千代に附け申す家老供の儀、私所存には、酒井雅樂を後見にそなへ、土井大炊を訴言の臣となし、青山伯耆を守につけ申すべきと存じ候が如何御座あるべきやと仰せられければ、家康答へて一段尤も可然也、竹千代を彼等三人に任せられ、脇より何程の事を申すとも聞入れず、彼等三人一同してもり立てよと申付け候はゞ、竹千代は明將軍になり可申ぞ。竹千代は、善惡ともに彼の三人申す事を用ひ玉ひて、必ず脇より人の言ふとを取りあげ玉ふ可らず。予が若かりし時、三郎に附置きたる人の事を、彌四郎め、樣々に云はせければ、誠と思ひ、予が一世の間、思ひ忘るゝ隙なしとて、涙を催ふし、子供の事は惡事ありと聞く時は、當座は心の外惡くしと思ひぬれど、日數を經れば、さは思はぬものぞ。くれ〴〵も三人に任せ、他人の口を用ひ玉ふべからず。其故は、附置くもの共の心底をよく〳〵聞かずして、中にてはからひ難く成るぞ。兎角、子供を能く守り立てさせ玉へ、國を望むも、天下を望むも、子孫の爲なれば、父子の間の滯りは、惡き事の上の逆事なりとの上意なりければ、將軍も御尤に思はれ、畏まり奉ると仰せらるゝとなり。

其後、家康、右三人を召寄せられ、汝等三人、竹千代を賴み可申と、秀忠が申したるは、未だ汝に申し渡さゞるや。秀忠同然に、予も賴むぞとの上意なりければ、右三人謹んで、未だ何たる仰せ渡されも無御座と申上ぐるとき、上意に、昨日の事なれば、定めて日柄を撰び申さるゝこと可有之。秀忠の內意は、雅樂を後見にそなへ可申となり、仁を以て育てよ。大炊は智を以て、伯耆は勇を以て守り立てよ。汝等、竹千代を予が風儀とひとしく守立つべきと思ふな。又、秀忠の風儀と均しく守立つべきと思ふ可らず。かねて言ふ如く、慈悲を萬の根元として、風儀はすき〳〵が有り、此意を喩へて言ふに、予は寅の年にて金性なり。秀忠は卯の性にて土性なり。竹千代は辰の年にて、火性なり。人の生れ付は大方この心ぞ。予が性金なりとて、秀忠を金性にチンと思ふてもならざるとぞ。此心に、人の風儀は俄になほりがたきものぞ。其の生れ付に

隨ひて、善政を行はせよ。第一の肝要は武道を怠らざることぞ。左れば、人の身命の生死をはかるに、脈を取つて手くび一寸の中にて知る如くに、武家に武道絶ゆるは、身命の死脈と知れと、仰せられける。

斯て、竹千代は果して明將軍となり、德川は三代にして、天下の基礎磐石の如く、葵の紋、いや榮えける。

妻の不平

奥州白石の一婦人

○言ひたいヿも言はず、食べたいものも食べず、遊びたくても遊べず、仕たいヿも出來ず、女は、ホントウに馬鹿らしいものです。

○男の方は、どふしても浮氣です。何だか、どふも當にならん所があり升。大抵、不貞節です。實に、きたないと思ふヿがあり升。

○借金ナカ、何も恐れやしませんが、いくら勉强して拂つてもまた出來るかと思ひやあ、勢が出やしません。ナニ、女は一生懸命になりますから、其の氣になれば、別にこはいヿもありませんのサ。

○男の方は、いつ迄も若い様な氣合で、ホンニ、お坊さんですよ。女は、氣の小さいのかどふだか知りませんが、ソンナ浮いたヿを當には仕て居ませんのサ。

○他人に信切らしい方は、なか／＼内で六かしいものですよ。お客のあるうちが、結句、よう御座い升よ。他人が居ないと、苦みきつて、夫は／＼氣むづかしいのですから子。

○男は、サンザ、癇癪でも起して、あとが、カラリとして、清々する方が、餘程、よふ御座い升わ。むしくしして、梅雨の天氣の様にうつとふしいのは、眞平ですよ。

○女だから心配させまいなどと思ひなさるのは、有がたい様で反つて不愉快です。男の方は、聞かなきや心配なさらんかも知らんが、女は聞かぬほど心配で、つまりませんよ。聞て一生懸命になつた方が、餘程樂です。

○いくら女房だつて、口惜しいと思ふやうなヿを思はせない様になさらなきや、損ですよ。何かに當りますよ。

○小説だの、女氣質だのツテ、いろんな事を書く人もあり升が子、餘程氣樂な人達だと思ひ升のサ。ソンナ、生ぬるいものヂヤアありませんよ。取殺すナカ、譯もないものですよ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

あんまり、女を馬鹿にしつこなしですよ。

○たゞ、女は生れつき、引ケ目をもつてます、人の女房になると尚更です。一度、傷物にされたフラスコの樣なものでは、どうにも取り返しがつきませんから、いつそ、死んでやらふナカと思ふものですがネ、誰れに死んでやるのでもない、自分で死ぬる丈けですが、どふかせざ、業腹が煮えきれませんのサ。ナニ、どうせ、決心しましたら、ドンナ事でも致し升よ。

○昔の奥さん方は、まだお樂でしたよ。アキラメられぬ中にも、チヤンとあきらめて居らしつたから、感心ですよ。なまじ、西洋の事など聞いたお蔭に、餘程、毒になり升た。

○舅、姑、小じうとナドト、昔から八釜しく言ひ升が、ナニ、夫だつて、大したとはありません、コンナものだと思つて辛棒すりや濟みますが、連合の人の賴みにならないの丈けは、辛棒が出來んものです。連合さへシツカリしてくれれば、外の事はどふでも宜いものです。

女心理學 笑の文學（其二）

無識菴主人

○○○○笑の種類——吾人は喜んで笑ふとあれば、憎みて笑ふともあり、嘲るにも笑へば、狂ふても笑ふなり。動物には人間の如く複雜せる感情なきが爲め、其笑ひも複雜なると能はず、而して吾人の笑ひは無聲の微笑と其れの高度に達せる有聲の笑ひとの二大別の外、くさぐさの名を用ゐて區別し得るものあり。試みに之を分類せん。

（甲）、自己には快感を生ずるも他人には厭味を與ふるもの。
苦笑、嘲笑、冷笑、盗笑、憎笑、狂笑

（乙）、自己にも快く他人にも快くあらしむるもの。
回顧笑、無心笑、滑稽笑、娯樂笑、大悟笑、耻笑

此外、自ら快不快を感ぜずして、習慣的に表はるゝ者あり、愛嬌笑、僞善笑是れ、自己にも他人にも不快なるは絶望笑、失心笑等なるべし、左に其大躰を説かんとす。

（一）苦笑——俗に「ニガワラヒ」と稱するもの、口僅かに開きて上齒少しく表はれ、口の兩角と兩眼の間とに多少の皺を生ず、

（二）嘲笑——俗に「アザワラヒ」と稱するもの、音聲はアハヽと

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

響かず、フ、ン、ヘ、ン、ハ、、の音多し、「何が」「彼れが」と侮る情のある時は、ア行よりハ行に移らず、大概ハ行のみ響くが如し、眼瞼上りて下齒多く現はれ下唇の開き方廣く、而して上唇開くこと少なし。

（三）冷笑――俗に「ヒヤワラヒ」と稱する者、時に「セヽラワラヒ」と云ふ、冷評的に笑ふにて表出は稍前者と同じ。

（四）盗笑――蔭に廻りて竊かに「氣味よかりし」との心にて笑ふもの、嫁をいぢめる姑などに多し、之を盗み笑ひと云ふ。

（五）憎笑――人を怨み憎みて笑ふ。敵者の失策の塲合に多し。

（六）狂笑――これ發狂して笑ふを云ふ、少しく疑問に屬するも發狂者と雖も笑ふ時は多少自己には快あるべしと信せらる。

以上は、假に自快他苦的の性質を帶ぶる者と定め、聊か其狀態を考ふるに、苦笑は自己にも多少の苦あるも、他より見れは特に厭味を感ぜしむ。冷笑と嘲笑とは大概己れより下劣なるものに對して發し、又何事か同等に競爭して相手の失敗せる時に生じ易し、此には自負、高慢、侮蔑の情あるを以て甚だ不倫の笑ひ方といふべし。傲慢の人に多きを見るべし。夫れ已に人を侮蔑す、爲んぞ美貌を呈し得べき。彼には不倫の

性あり、面相に美的の表出なきや知るべし。苦味を存し酸味を帶ぶるは是等の笑ひなり。

盗笑は人の見えざる所にて、獨り盗み笑ひするなれば、他人に厭味を感ぜしむるは其發見せられたる時に限らる、而して嫁をいぢめたる老婆抔が蔭にて笑ふ時は、自らには快く感ずるや明けし。狂癲の笑は一種の寂びしみを含み、見る人をして一種の恐怖心を起さしむ、余は狂者の笑を以て常にさびしきものゝ一とし數へり。以上の笑には聊か美的の趣味なく從つて好き笑ひには非ず。是等の笑ひに特色なるは自然的のアハ、の音、稀に、ハ行の多きと、口の兩角の大に廣からさると、下唇の割合に下がると等なり。頃日巣鴨病院に至りて狂者の笑を見しに彼等には快きか如く見え、而も我に寂味を與へ曾て實見せし例を更に確めたる心地す。夕暮に山中にて婦人に出逢ひ、一と笑ひせらるゝ如きは、最も恐ろしく感ずるもの、狂者の笑よりも刺激の度一層大いなるを覺ゆ、而して斯の狂者といふは重もに婦人を指す、男の狂者の笑ふは稍滑稽じみ。寂びしさよりも可笑しさを催さしむる者なり。又た可笑しさより漸次憐憫の情を起さしむるに至る、普通人の笑

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にして憐憫にまで至らしむるは未だ之れあらず。
(七)回顧笑――俗に「思ひ出し笑」と稱するもの、こは獨居の際又は獨歩の時、種々の連想より前に爲せし事など思ひ出し以て笑ふ者なり。「何を獨りで笑ひなさる」と家人の問ひ、「何か可笑しき事のありと見へて、彼の人は笑ひながら歩く」と云ふ場合之れなり。多くは微笑たるも時に往々有聲にして、アヽの響きあり、アハヽは殆んど全くなし、故に閉口する場合なく、口の兩角の開くあるのみ。邪氣を含める嘲笑、冷笑盗笑には思ひ出しの繰り返す事少なく、多くは愛情の事、滑稽の事等に屬するが如し。但し美しとは云ひ難し。之れ何事か獨占にて樂むと認めらるゝが爲めなり。
(八)娯樂の笑――娯樂笑に入るべき範圍は、稍廣く、嬉しく樂しく喜ばしくして笑ふもの皆之に入るべし。太平樂の笑ひ又は馬鹿笑ひも此中に屬すべし。祝宴、親睦會等には最も多く表はる、アハヽの音聲を發し介心する所、遠慮する所の少なき笑ひ之なり。
(九)滑稽笑――之には二種の別あり、道化たる駄洒落風のものを笑ふと眞の滑稽笑と是なり、前者は娯樂笑の中に多く含まれ、後者は詩人の笑ひにして審美的の好笑なり、滑稽とは蓋し人間の欠點の可笑しき例に同情するもの、他に大なる情を激動せずして品格ある人、或は興味を下辱せらるゝに生ず、されば一見失笑を忍ぶ能はざる不自然たる事物も熟視し來れば其間に人生の運命、無常、欠點に想ひ至り同感の情を起すに至る。こは詩人の看取する笑ひにして美の趣味を帶ぶ。
(十)大悟の笑――「是は浮世の辛酸を味ひ盡しての笑ひなれば、笑の間に安住ありて聞く者を魅する力あれど、若し教訓の意籠る時は興味索然たるものとなりて、往々にして自尊自負の笑ひに類似す」とは、逍遙博士の嘗て論ひし所、洵に然るものあり。大哲學者、大宗教家、豪傑等の笑ひに見るべし。
(十一)無心の笑――小兒などの別に理由もなく無邪氣に戯れ笑ふもの、必ずしも特別の事情より生ずるに非ず。
以上は概して自らに快きと同時に、人をして快く感せしむる類なり、倫理上より見れば可なるものにして、社交上亦必要のもの多し。其他も種々あり。
(十二)愛嬌笑――こは別段の可笑しき事情あるに非ず、又嘲るにもあらず、格別の樂しきにもあらず、唯ニヤリ〳〵笑ひを催

すものなり。多少の快はあるべきも特に快感といふべき複雑に適せず、之れ社交上、便宜よきより因襲となりて習慣性となれるものに非る乎。愛嬌あるものなれば斯くは名けぬ、習慣笑ひといふも可ならん乎。

（十三）絶望笑――はヤケ笑ひなり、心乱れて麻の如かりしもの漸く變じて絶望となり、顔青ざめて凄味あり、ハ、、、の響多し、口開きて容易に閉ぢず。茫然たる状あり。

（十四）偽善笑――は虚飾に出づ、態と苦さを隱し時所位の如何、人の機嫌、將來の結果其他を想見して、可笑しからざるものを笑ふを云ふ、之れ偽善の笑ひなり、ハ、アの如きは行の音聲多し、外見を故意に飾りて笑ふもの皆之に入る。

（十五）恥笑――恥辱を嵩りて笑ふとはあらざれど、輕き意義にて、何となく羞かしき心地せられ、多少嬉し味の加はりたる時は笑を催すことあり、こは娯樂にはあらず、例へば少女の戯言を云はれたる時に、笑ふ如き大に嬉しくして笑ふと云はんよりは重に耻かしくして笑ふと云ふべきものたり。こは多く妙齢の女子に見る所にして、美的の趣味を帶ぶ。

右の種類は正確とは云ひ難し、唯思ふまゝを記せしのみ。更らに別方面より記する所あらんとす。

文藝

禮道幽旨

◎水は一度は天に上り、流は遂に海に下る。一技一藝の末と雖ども、之を專攻して其妙に入るときは、必らず遂に「道」に達すると云ふは、古よりの遺訓である。維新前の學風は、此處の心得をお定まり文句に言ひ列べて、耳にタコの入るほど聞かせたれど、當今の學風は丸るで其の反對である。之れ一つには、學問に分科が行はれて、それ〳〵の專門が精しくなり、道徳の事は道徳、技藝の事は技藝と云ふやうに、判然區別するやうな習慣が行はれたからである。然し、技藝も亦た人の行ふことで、其人に古今のかはりはなく、今の道は猶ほ古の道の如く、覺悟と云ひ、修練と云ひ、自得と云ふことには、變化のあるべき筈でないから、一藝一流の末技を修むるものも、依然として此般の心得がなくてはならぬ。方今の學風には、むしろ此の心得が無さ過ぎるのである。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎支那人は、禮、樂、射、御、書、數を、六藝として、古の學問に用いたることであるが、茲に、先づ、禮の一事に付いて申さんに、男禮、女禮、數百千條あるが、つまり、男禮の極意は、武道、政治にまで關係することであり、女禮の主意とする所は、節義、女德等に重きを置くこと勿論であつて、決して躾をつくり、裝ほひをこらし、身の風、姿を美くしくすると云ふ丈けの目的でないことは言ふ迄もないのである。然し、禮道の大目的の講ぜられざること久しく、世の人の之を忘るることも亦久しいことゆへ、今となつては、禮は只だ虛飾の一種で、心術に關係するとは至つて少ないやうに思ふものが多い。夫故、女に武藝を敎へ乍ら、女禮を敎えれば、丸るで矛盾したとの樣に思ふのが常である。

◎曾て、小笠原禮道の本家たる、小笠原淸務氏と禮を談じたるときの筆記がある。左に掲げて一應、讀者の御覽に入れる。

◎禮の式目は、時に應じて變化いたすべきものと被存候が、いかゞ。

時、處、位に應じて、變化するは申すに及ばず。禮の敎授に用ふる式目も、今昔夫々變化はしめ候。昔は、男禮、女禮各百ヶ條といたせしが、近頃は大に畧し候。女禮に於ても、もとは掃除の仕方などより初めしが、今は對客進茶などの類を初めより用ゐること致し候。

◎式目に種々あるは、禮の心養はん爲めの修練と存ぜられ候。もし禮の心を養なひて、其道なるものを得せしむれば、施こして宜しきに適はざるものなきに至るの譯と愚考せられ候、いかゞ。

左樣にて候。座するとき申すに及ばず、たとへば、臥して寢る時にも、禮はあるものに候。横にあるも、竪にあるも、一道の宜しき筋あり、之に適すれば、自から、禮となるものに候。

◎即はち、自然に適ふと申すものにや、最とも自づからなる處、是れ禮の筋ならんと思はれ候が、如何。

眞とに禮は自然の處に着すべきものにて候。夫故、禮は究屈ならず、之に順がへば久しきに耐ふべく候。修め飾りて、自然を失ふは、禮の主旨にては、無之候。

◎劍道、兵法など、皆禮の中に籠められたるも見受け候が、いかゞ。

劍道は別とし、兵法などは素と禮の中に置れ候。今は射、御の二つを兼ねて敎授いたし候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎射には鵠あり、御には馬あり、習ふにハヅミあり、修練に結果見えて、學ぶものゝ心を刺激いたせど、所謂る禮法には合手なきやうにて、學得上、便利の効うさしと存ぜられ候が、いかゞ。

左れど、一歩一息、一禮三息などの呼吸をもて、只管ら心を修め、膽を凝らするときは、氣合ひの熟するものに候。シカシ、弓を射るときは、馬に乗る時よりも腹のすくものに候。これ丹田に力を据うるとの多き證據にして、射藝が、禮を學ぶに尤とも効力多きは爭そひがたく候。

◎精神の悟入は、形よりする者ゆへ、先づ式目を主として自づから禮の道に悟入せしめ玉ふが當然の順序ならんが、普通の禮の教授は、たゞ形に流れて精神を全く沒するもの多しと見受けられ候。形の教授に添へて、チラ〳〵と精神を示めすの教授は、如何に候ものか。

其事肝要にて、吾等は左樣に教授し、門弟等に、時に應じて主旨を話しきかせ候。三々九度の婚杯にても、たゞに、アチラ、コチラへ杯を廻はすの形にのみ拘泥し、肝要の主旨を全く忘却するとなりしは殘念に候。これ、畢竟は「マコト」を顯はし、全心の赤誠を示すの形たるものを、其心なくして、たゞ形にのみ流るゝとき、是ぞ即はち禮に反くものに候。

◎御家傳の紀元の大畧を承りたく候。

小笠原家の禮祖は、六孫王にて在はす。源家の初代はことに、禮道を重んぜられ、爲義、義朝、頼義など、皆な鳴絃の術堪能にてあり、義家なども深く禮を學ばれ候。

◎義家が學びし兵法とは、即はち禮の事に候や。

左樣にて候。

◎頼政が鵺を射とめし古事、比喩にて候か、又は怪鳥を射落せし巧妙の事實を賞めしものに候か。

比喩にて候、惡魔降伏の。

◎さこそ、佛道などと默契の所ろ多く候はめ、茶道なども、禮の中に候か。

神、儒、佛、いづれも非とす可らすとは、吾家法の教に有之、もしも落つる所ろを言はば、もとより同じ所に落行き候半。茶は、もと禪より發りしものにて、自から別にいたし候。

◎禮の奥妙は容易すく窺がひ難き所に存すべく、隨がつて、「之」と言ひ玉ふとの難き所に在ることとなるべし。左れど、一事を問ひまつらん。即はち、禮の道は、施こして之を世態百般の人道に行ふべき道の據り所とせらるゝものに候か。

左樣にて候。

◎もし劍を以て向ふものあらんには、禮の道を以てして、切りがたきものとせらるゝか。

切りがたかるべく候。

◎そは、劍を以て向ふことなからしむるの故に候か。即はち禮に於ては「爭ひ」を禁止いたすものに候か。

爭そふにも、戰ふにも、尙ほ禮の道はあり。戰に於ては、即はち義戰、これ禮、要するに、禮の節は義にて候。劍法にも水を切るの術あり。茶に於て、祐天か茶を立つる手さばきの氣合ひに、庭前の狸か思はずまねて死せしてふ古る事あり。禮に於ても、其邊の氣合ひはあり。鳴絃、矢を放たずして、射落すことを得べく候。耶蘇敎にも、種々其邊の事の候よし。かの十字架を重んずる一事など、甚はだ味わりと、密かに考へ居候。吾家は、朝廷より「十」の字を紋符の爲めに頂戴いたせり。

◎そは、圓滿の相の意に候か。

左樣に候。シカシ、其「十」の字をたゞ「十」の字にせず、其の字脚を左にはねることに候。これに意味をこめ候。

◎蓋し、發動のこゝろに候はずや。

眞とに左樣なり。たゞ圓滿のみにては、面白からず候。亦、此の「十」の字の外に「王」の字を頂戴いたし候。即はち、三の氣を貫ぬき串すの心にて候。吾家は、此二つの字を合せて、家紋といたし候。

◎禮の道とする所の大躰は、之によりて窺がひ知ることを得べきであらふ。但し、道は藝より入り、精神は姿に伴ふべきものゆへ、先づ其の修業に、形より初めて、遂に自然に其の道なるものに悟入するが順序であるから、初學徳に入るの門から、一々、高尙幽玄の說を楯にすべきでもないが、敎ゆるもの、此の心を以て自然に重きを爲し、敎えらるゝものゝ亦た此心を以て自然に尊敬するやうになれば、禮も今日の如く形式一邊に流るゝやうな事がなからふかと信ずる。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雑録

鬼面百相（其八）

清柳有美

●めくら千人の世の中なれど、目明きも又千人あるを忘るべからず。

●日本に若しドレフユー氏事件起るも、これがため、かほどの騒ぎは、よも起るまじ。これよしと天下擧りて皆な彼れを責むべく、これを辯護する馬鹿もの、一人だに是れなからん。蓋し歐西人の猶太人に於けるは、猶ほ邦人の朝鮮人に於けるが如ければなり。

●『美』の根底は、觸覺にあり。『羊の大なるもの、之を美といふ』と古き字典にあるにても、明けし。

●女の顔つきの、離れて見れば美はしく、近づき窺へば、怪きまで醜く、そばかす、あばた、にきびなどに汚れ居る如く、其心根も、離るゝほど美しく見え、交るほど野卑の正態を現じ來る。

●餡類の酸敗れたるは、けふ此頃、誰人も鼻つまむべけれど、婦といふもののみ『すれッからし』なるほど、面白し。

●法王グレゴリー第七世は、我が聖徳太子に似たり。その共に、宗教を以て天下を統一せんとせるや、相同じ。たゞ、一は世界的にて、一は國家的なるの差のみ。

●現代の歐西文明を以て、歐洲一天張りの文明といふは、誤りなり。大に波斯化せられ大に希伯來化せられ大に亞弗利加化せられ、大に亞剌比亞化せられあるなり。たゞ未だ其支那大陸化せられざるを惜む。

●厭世思想は、胃の不消化より來ると、又例のショウペンハウエルいへり。

●宇宙間の萬物は、皆な我が顔をうつす鏡なり。

●平凡なる人物とは、生理的人間に共通する性質のみを有するものにして、著く特殊の個人性を有するもの、之を偉人といふ。下等動物は、種族通有性の外、何物をも有せず。

●人もし大學敎授とならば、如何な馬鹿者にても學者となること、夢々疑あるべからず。敎ふるところ一週數時間、得るところの俸給百金を下らず。よく寢ね、よく食ひ、よく遊び、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時あり、書あり、家あり。學者たらざらんとするも、豈に得んや。試に『鬼面百相』の記者を拜して、大學教授となし、之れに毎週數時間の審美學講座を擔任せしめよ。必ずや歐西の學者をして瞠若たらしむるの名講義あらん。

●長閑なる春の朝、落花紛々たる間に、かの小供俳優といふを、舞ひ踊らせなば、如何に美はしからめ。

●北齋が漫畫に喜ぶ歐西人の趣味は、前の巴里萬國博覽會に、米遷を歡迎せるに非るか。是れ蓋し遠近法の嚴しき束縛に反動して、フレスコ時代のむかしに還るを悦こばんとするなり。

●人、老ふれば、衰へて生氣なし。社會の制度文物悉く皆な然なり。年を經ること多ければ、從て無意義のものとなる。是に於てか、猶太敎亡て基督敎出づ。今の基督敎なるもの又必ずや亡びて、玆に救主の再臨あるべし。

●己れの力を信ずること如何に厚きも、決して禍を買ふことなし。されど、己が力、よく他人を制し得べしと信ずるに至りては、蓋し身を亡すの本なり。

●羅馬帝國の首府を、ビザンア井ヤムに遷せるは、東西文明の融和を引き起せり。

●妖婦とぞ稱ばるゝ怪しき手取女の、末遂につまらぬ男と可笑しくもあらぬ契なして、其身を憐れに終ふるは、概ね世の習なり。こは、賢き男どもの、追々その手練手管に感づきて、遠ざかるより、遂には之に近るもの殆んど跡を絶ち、たゞ『芋の煮たも御存知なき』馬鹿ものゝみ、我が身の食ものにせらるゝをも知らで、いつもの如く近づくより、流石の妖婦も心淋く哀れになれど、この時は、望あるものども、皆なごり〳〵して離れ去りたる後なれば、情けなくも、多くの善き心ある男泣かせし萬金の身を以て、あたら破漢に與へ委するに至るなり。これも鐵ならぬ刄にて數許多なる男殺し、或は之をなぶりものにし、また、騙し討などせし天罰なりと知るべし。恐ろしきことならずや。穴賢。

●人を使はんとならば、我が手を離るれば、路頭に迷ふ如きあくたれ者を用ひよ。必ずや忠勤無二ならん。されど、使ふ人又尊敬の心を忘るべからず。

●海舟伯を才氣一偏の人なりといふは、なほ正成を謀略一偏の人なりといふの愚に同じ。

∴西郷を學ぶもの、假令『妙』に達せずとも、大なる過ちなし。されど、海舟伯を學ぶものに至りては、堂に入らずんば、其身と人とを傷くるの大怪我あらん。

∴婦人は、常に、男子の薄情なるをつぶやけども、男子を薄情に仕立つる者は婦人なり。いろは加留多に曰く『身から出た錆。』

∴僭政一變して外戚の政となり、再變して院政となり、三變して幕府政となり、四變して議院政となれり。

∴法皇或は幕府の、朝廷に於けるや、猶ほ羅馬法王の、歐洲列國に於けるが如し。

∴天主教は、詩的にして厭世的に、しかも唯心的なり。されど新教に至りては、樂世的にして唯物的たり、全く散文趣味のみなりと知れ。

∴天主教にて永童貞女マリヤを、こよなく有難きたてものとするは、其僧侶が凡て獨身たらざるべからざる故ならんか。坊様とて木にもあらねば、畫像を見せ之を念ぜしめて、異性の慰めを與ふる仕掛なりと知らずや。

∴兒に病ひ有とて、之に入院の取計らひまでなすも、もし其親たちの、看護に伴ひ居らば、仲々に寸効もなかるべしと、さる人の申されける。

∴友達などいふもの、餘り親しからざるを良しとす。殊に異性の友達とは。

∴詩人は摸造者に非ずして創造者なり。然らば、畫家も、無論、創造者たるべき筈ならずや。

∴Messは『飯』に通じ、Tは『丁』に似たるも、おかし。

∴神は、絶躰の善に非じ、進化すべき善なり。

∴女とは、おかしき動物なり。その同性相談らんとするや、必ず先づ共に手を握り、或は共に肩に依る。これ果して何の兆ぞ。僞善か、依頼心か、將た接觸を好むの心か。

∴信長とは、恰も我が子の如く光秀を愛せし人なるべし。是に於てか、我儘つのり、遂に本能寺の變あるに至りたらんか。これ、無理難題かくる親の子などに、よくある例なれ。二人ともに、責むべからず。

∴信長は、途に秀吉を見て、直に登用せり。然るに、今の登用試驗などいふもの、さても迂遠の沙汰ならずや。如何なる法にても、秀吉の如きを登用し得ば、則ち足る。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

∴南洲の秀吉を學びたること、猶ほシーサーのアレキサンダーに私淑したるが如けむ。

∴小供は、父親に附くべきものなりとて、離縁の時など、常に男子の負擔となるが世の常なれど、　れ全く所因なきことなり。かの袋鼠とぞよぶカンガルーを見ずや。終始その子を胸の袋に收めて、危きことなどの起らば、之を入れたるまゝ難を逃るゝこと、全く其母の働きにて、牡獸はかの袋さへ持たず、我が子の養育には、關りなきことなり。されば、小供は母親に附くべきものにて、父親の關はるところにあらず。離縁の時など、無論女子の負擔なりと知るべし。

∴敢て問ふ。戀愛と胃袋との關係それ如何。

∴三成を梟首所罰せしは、家康終生の恥辱なり。

∴歷史は暫く其編纂の躰裁を變へて、先づ政治史を書き下す前、風俗史を叙するを以て得策なりとす。

∴留岡君の言葉ならねど、凡ての人は皆な罪人なり。其友を誘ふて、惡に陷らしめんとせざる者少なし。されば、監獄もし分房制を行はざるべからずとせば、學校寄宿舍の如き、又分室制度を取るべきなれ。

∴人は、露帝が平和會議の提案と、其軍備擴張との矛盾せるをいへど、露帝の意志の矛盾せるに非ず、露帝と露政府との相調和せざるなり。天下の人、むしろこの邊の堪辨なかるべからず。

∴今の世は、オフエリヤの如く、白痴めける『お人よし』の婦にては、仲々に渡りきれじ。凄き腕磨きすまして、遇ふほどの男に、あぶらかけて見よ。

∴女子の、男を弄ぶや、猶ほ猫の鼠を捕へて、之をおもちやに、いぢり散らすが如し。餘程氣丈夫のものならねば、半死半生の躰となるなり。

∴呉服屋の番頭は、凡て男子に限ると知るべし。その客足多くは女子なればなり。小店にても、亭主殿女房と差し向ひなどにて店番せば、到底寂滅の本なり。況んや、女房たる身の彼是商ひ言に口だしするに於てをや。

∴美術は、主觀より出でゝ客觀に入り、又主觀に還る。

∴『てにをは』といふもの、追々は日本語のうちより煙滅すべし。其しるし既に現れて『僕は行く』といふ代りに、『僕ア行く』などとなへて、追々消えかけ居るなり。

●婦人とは、物事を大袈裟にいふ人種なり。

●女に愛想づかしせるもの『鬼面百相』の記者のみかは。女のうちにも、女といふものに愛想をつかし居るもの仲々に多からめ。されど、こは、自らその山水に育てられながら、我が郷土を罵り笑ふしれものと異らざるぞ、あはれ。

●男子のづるきは小さくして、たゞ小づるきに止まれど、婦人は然らずして、大にづるし。『愈々』となれば、女ほどづるきもの、世に稀なり。大地震などの時、すましこんで家に止り、あわてゝ走り出でざるは女なるべく、一朝産破れて、亭主狂亂の苦しみある時『どうせ心配したッて、還りやしまいし』などゝ、糞度胸を据えて、すましこむも、また女なるべし。

●或人、福澤諭吉氏を見て、『福澤諭吉＝高島嘉右衛門－髭』と言ひたりとか。然り、容貌とは爭れぬものにて、この兩氏の面持頗る相似たり。其寫眞を較べ見よ。

●西洋にては、藝人への贈に、花束を贈る習ひあり。日本にても『纏頭』の事を『はな』といへば、昔は同じならわしのありしにや。

●天氣の定まらぬうちは、蚊の出多きものなれど、一たび定まれば、不思議にも、その出の減るものぞと、さる人申されける。蚊殿も落付く心になるにや。

●小兒の、野蠻時代に作られたるお伽噺を悦ぶは、其發達の程度、野蠻人と相等き故なるべし。

●商標は商戰の紋所なり。

●近來茶菓子の傾向は、頗るビスケット的となれり。

●十九世紀は百事專門の世の中なり。耳科醫院あり、眼科病院あり、胃腸病院皮膚病院あり。さては、腦病院さへ起らんとす。然らば、四百四病のそのうちで最も難しとせらるゝ戀愛病專門の病院なからめや。古き『文學界』の仲間たち、之を起すの心はあらせずや。其消息、如今如何に。

●男は胃袋の如く、女は食物の如し。飽かぬうちは、餓鬼の如くに積め込めども、足り來りて我が心滿つれば、之を吐き出すと、シエークスピーヤいへり。こは、男を惡口して女に肩持ちたる言葉なれど、其逆論も又眞理なりと知るべし。

●また女とは、貴婦人の裝ひして食卓に就けるエソップ物語の猫の如きものなれ。しばしは殊勝氣になりすまし居れど、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鼠の、室の片隅に飛び出で來りては、最早、え耐え難く、直に椅子の上より四足匍匐にて舞ひ走り、好き餌よと噛みつくなり。そのさま、見られべふもあらじ。

∴始は、終なり。故に神はアルファなり、オメガなり。

《次號に『美人七ッ道具』を載せ、其次には『審美學斷片』を掲げ、《其十》を以て、一ト先づ完結すべし》

竹本素行を訪ふ

小川桃花

名人の器なるや否やはわれ知らざれど巧手としての竹本素行は確に有數の大家なり、彼は天才の人にあらざらんも、幵が千鍛萬錬の技は能く聽者の情緒を動す。彼の義太夫や、碧落直下碎二巉巖一の雄渾あるなく、將た鼓鞞轅鞯白波衆の痛烈も問關鶯語花底滑の嬋娟もなけれども、幽咽泉流水下レ灘、此時無レ聲勝レ有レ聲の感は彼を聽て起る所、亦一種の趣味なり。これ素行の素行たる所以にしてまた淺薄なる時俗に隆々の人氣なき所以か。去年の逝春彼の病むやわれ之を下谷の僑居に見たりき、病閑なるの故を以てしばらく談ずる所あり、歸來戯れに之が記を作り漫然として篋底に投じ置きしが、頃ろ佛國一名優の傳を讀み名匠苦心の迹、東西轍を同ふするものあるを感じ、篋底を探りて同好の狂者に示すと云爾。

無くて七癖と云ふなるに、ありて最も烈いのは僕が義太夫好の癖である。之を聽くのが僕の唯一とは云へないけれども、或意味に於て殆んど大部分を占むべき慰安で確にある。僕は昔から凄愴慘憺たる境遇の中に育ッて、暖い家庭の慰安を持たぬ男で、また勿論異性に對する愛情の慰安抔は持つべき筈の人間ぢやない。是は種々の理由もあるがソンナとは雖ふるの必要がないとして唯僕は好だから好で宜いのだ。

僕は元來、凡ての事に不精で何物に對してでも我を忘るゝとのできない、つまり頭腦の不規則な、くだらない妄想のみが常に雜然紛然緜屑を無茶苦茶に丸めて投込てあるかの樣な形狀で、何事にでも一事に熱心になれないから、每々人一倍腦を苦めてそれで實蹟の一向つまらない困ッた性質の男である。だから何を行るにでも苦痛や煩悶が必ず相伴をする、徒に神經が亢憤する、感情が激發する、不快で堪らなくなる。所が妙だ、義太夫を聽て山が絕妙の域に達して演者が無我の境に入るときには自分も萬事を忘れ氣取ッて云へば三昧に入るとができ、何とも云へない浮た所のない、自分の趣味に最も適して居る妙にうら淋しい一種の快味を感ずる。そして後の心地が淸々して、人も家も壓潰して了ふと云ふ檻幕で重り合ふて降ッて來る溽暑い雲が世の中を支配して居る夏の夕暮に一しきりの白雨がありて、それが霽て木々の葉末には白露の玉を連れ空は研きたての鏡の樣に澄て間もなく抱回されない程大い圓い十五夜の月が皎々として東の山の端を離るゝとき に覺ゆる樣な堪らない心地がする。マア、ソンナとは措て、義太夫は僕が世の中に居るには是非ともなければならない。これがなければ極端に云へば僕も殆んどなくなると云ふ程大切なものである。

ト云て義太夫語の語る者なら何んな奴の喉から出るんでもいゝかと云へば、なかなかさうでない積だ。僕は前にも云ふた樣な事情であるから何時でも貧乏して居て錢もない癖に足近にある席亭にも大抵行く、けれども去年頃まではたゞ譯も分らなく極めて消極的にまきらはさうと云ふ氣で誰でも聽て居た。段々聽く度が重ッて來ると耳も幾分か肥て來、また自分にも思想や趣味の變遷もあるから近來ではつまらんものは聽かぬとして、綾瀨太夫、素行、小淸の二大家に併て鯉之助と決めた。尤も、鯉之助は未だ三度ばかりしか聽かない、が、彼女は確に僕が胸底の琴線を搔鳴らすの手腕を持て居る。僕は一度彼女の容貌風采を見てその淸秀なる一種仰望すべき氣品が何となく懷しく妙に胸底に烙印されて忘るゝとができない。濡衣の口吻ではないが『わたしや輪回に迷ふたさうな』だかも知れない。しかし決して色の戀のと云ふ浮た沙汰でないとは自分で確信するとができる。けれども夫は極めて昨今のとで、他の三大家に至ては綾瀨の古蒼遒勁なる、小淸の雄渾痛烈なる、素行の深刻幽寂なる昔から感服して居た。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

三月の下半は素行一座琴平にかゝッた。

僕も路は遠いが(當時番町に住む)彼の宗支庭室は必す聽ふと思ひ語物の新聞に出るのを刮目して居た、僕は元來三大家の中甲乙はなけれど、中に素行が比較的一番好で彼を聽く爲めには苦勞も厭はない千里をも遠しとしなかッた。嘗て友と淺草に遊びフト東橋亭に懸ッて居る素行を聽ふと云ふ氣になッた、其時はまだ午後の二時で、席亭の始まるまでには何しても五時間以上ある、頃は一月の寒天、カラ風は頰を殺がん計だ、それを非常な辛抱で公園を彷徨て時間を殺し、到頭其絶妙なる中將姫の悲曲を聽て本郷の下宿へ歸ッたともある、普通から云へは隨分御苦勞な話だ、マア斯んなのが一例で外にも澤山ある。

所へ或時われと同き義太夫狂で芝に住で居る迷悟生といふのが遣て來て『先夜琴平へ行ッたら素行が病氣とかで出なかッた折角妙曲に耳を洗はうと思ッて行ッたのに僕ア實に失望しッちまッたね職々しい掛合なんか聽きたかアないからサッサと歸て來た』と云ふ話だ、其から四五日經ッてまた來た『昨夕れ彼亭の前を通ッたら堪らなくなッたから素行がモウ出るのかと聞て見たスルト君どうもお氣の毒樣病氣がまだ癒りませんのでと云ふぢやないか忌々しいからづイと歸ッて了ッた』。それで僕は素行が病氣のとを知ッた。最初に聞たときには一寸した感冒でもあらうと思ッて別に氣にも留めなかッた、所がこの話を聞た僕はサア大變だ、氣が氣でない、これは實に天下國家人種民族の一大事だ、僕は心配で堪らない、それから一昨日築地の歸途に琴平に寄ッて樣子を聞て見ると『素行さんは病氣でれアンタ前の高座も半分から休んで手前共へは是非出る積りなんですけれどもどうもハッキリしないとか申して來月一杯位は休んで湯治にでも行く樣な話でムりますへへゝゝ』『ちや何かれ非常に惡いんかれ』『イエそんなに非常と云んでもありますまいけれども何分高座で御目見えする譯には參りませんさうで‥‥』『成程ぢや僕は見舞に行かうと思んですが一体彼人の家は何處でしやうか』『左樣でムりますれ一寸‥今分かり難ますがなんなら晩方にお出被下ば調べて置きます』と、何ぞ夫れ拔目なき。

僕は所謂晩方には行れなくッて、其次の日も種々と川が有ッて行き難た。今日になッて見ると實に堪らない、異樣にかう何か義務でも缺いて居る樣な、神樣に勤めでも怠ッて居る樣な氣持がして且は今年の一月に聽たッ切りだから懷かしい樣な氣もして、どうしても行かずに居られない、午後こそは行かうと思ッて居る矢先に例の迷語生が遣ッて來た、必定同情を表するとだらうと思ひ其話をして見ると『驗せゝ君、品格に關はる素行を訪ふ程なら外に訪はにやならん人が幾らもあるぢやないか』と、膠もない挨拶だ。僕は稍ゝ癪に障ッた、何故素行を訪ふのがつまらないか、くだらない鬚ッ面の所謂名士なるものを訪ふて屁の樣な駄法螺や豚の如き腹から出る俗談で耳を穢すより幾等いゝか知れない、迷語生も俗物だ彼んな奴は話せないチョン馬鹿々々しいと僕は憤然として家を出た。そして第一に琴平に行ッて彼女の居住を尋るとやう〳〵のとで下谷徒士町の通りで門に柳のある家の裏で彼女の本名は市川花といふと丈僅に知り得た。急いで新橋に行ッて折能く通り懸ッた鐵道馬車に飛び乘りゆられ〳〵て程もなく上野へこそは着きにけり‥‥夫から交番に聞て徒士町の通りなるものに行ッて見ると往來を橫つて一丈許の紺色の汗溝か流れて居る否寧ろ溺つて居る、只見ると溝に沿ふた奧の方に家が在ッて柳が澤山植はッて居る、うなづきつゝ這入ッて行ッて見ると、柴田薰鶴澤抔と云ふ門行燈が見える、此邊に遊びないと遍く界限の橫町新道の如き所を搜したがどうしても知れない、人に聞いて見るのも極りが惡いし、遂に知れないから他を捜さうと再び通りへ出て柳のある所は片ッ端から探り今度は構はないで聞いた、車夫だの大工だの米屋だのに。夫でも知れない。稍ゝ絶望したがフト考へ付て今度は先に搜した所に戾ッて來て鶴澤と云ふ行燈のある家に尋れた、こゝでやうやう知れた夫から教へられた通りに行くと徒士町一丁目で柳の非月と云ふがある、すんなりして纖々と風に隨ッては居るが決して折れて了はずに優く老て愈ゝ氣高い柳の一本が板塀に半身を凭せながら往來を覗いて居て古く小やかなる門の內に釣瓶の竹の見えるのが即ちそれである、これなんめりと胸轟かせながら、雨に曝され塵に塗れて何枚も重れて幾所にも打てある何々講の木札と一所に並べて打てある二三の表札を讀んて見た。果然！お家流の優い文字で市川はなといふのが僅に讀まれる今は躊躇するの必要がない、ズン〳〵這入ッて行くと右手の方に芝居の住家の段的くゞりがあッてそれに又市川花と記した札がある、家は極々質素な住居で高く見積ッた所で六圓と出ない裏店である。入口の戸が明いて居る上り框

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の障子も一尺程明いて居て今五歳計の絣の筒袖を着たクリ〳〵した男の子が沓脱の石に降り樣として居る、そこから臺所も見え下女が何か夕餉の準備でもして居るらしい。

御免なさい

前掛で手を拭きながら下女が勝手から出て來樣とするさ、結城紬の黒ッぽい檗皮色の柄の大きい辨慶縞の温袍を着て少し寛りさしたつくれ髮の後姿を見せて長火鉢に凭れて居た人物が、ハイと答へて顔を入口の方に向けた、これは高座で見るよりは少し色が白く柔和で且つ妙に何處か垢の拔けた所のある割に若やきて見える病中の紫行である。是より問答躰になり△が僕で〇は紫行といふ符號を付けやう。

〇どちら樣でムりますか

△イヤ突然參ッて失敬ですが師匠さん(僕は彼を呼ふに適當な稱呼を得なかッた苦心慘憺の後師匠さんとやらかした)の御病氣と云ふ話を聞て一寸お見舞申たのです

〇オヤ左樣でムりますか、どうも御親切樣、サア何卒此方にお上り被下ましと自ら立てこそは入りにけり……上るさ
さッつきは六疊の間で壁には四五張の三絃が懸ッて居り長火鉢と反對の方向には脱捨てた衣類抔が落散ッて存外狼藉たる光景だ。右手の方は一間二枚の襖の一枚が明け放してあッて四疊計の席さの室だが眞中に大な鏡臺が据へてあるばかり外に何にも見えない、想ふに門下生の居間兼化粧室でゝもあらうか、延かれたる次の間に入ればこゝは師匠の病蓐で、襦の方には四ッ折の小屏風を立廻はし枕頭には藥瓶やら薬物やらが雜然と並んで居る、廣さは矢張六疊位一方は障子向が一間の床に一間の押入れ即ち枕頭で障子と反對の側が箪笥と佛壇、そして障子の下には矢張大きな鏡臺が据り室の裝飾と云ッては餘りない方で、普通の藝人的神棚(是は延喜棚といふものゝ由後にて友の爲に大に其不通を笑はれたり)の如きも一躰に淡泊りして居る實は話しの方に實が入て精しい室内の觀察をする餘裕がなかッた、紫の坐蒲團が二枚敷てある一は普通のであるが他は師匠のらしく並よりは大きい、大方高座用の古手ででもあるか、紫行自身は病蓐の橫ッ端に坐り、サアお敷き被下ましと坐布團を薦めた、簡。畧な初對面の口誼終り、病容を訝るさ

〇難有うムります、今日はお蔭樣で大分宜うムります……何處が惡いと仰いますか、腦病なんでござんすよ、親から遺傳でムりまして子供の時分から腦が惡うムります。七年ばかし前にも餘程甚く病らひましたが、今度の樣な目に遇ッたとはありませんよ、モウ〳〵酷ひ目に遇ひました、年を老るのに掛持をしたりするもんですから、何うしても冷えまするんで、毎々冷えて逆せて腦を惡くします、人間も四十近くなッちやモウ駄目でムいます子ー、だが妾も好なもんですからナーニ大丈夫だ〳〵で押して出まするんでつい這度の樣なめに遇ひました、醫者は何うしてもいま一ト月位も休んで、よーく養生しなくッちやいけないと申しますが、どうもこうして休んで居るにも氣が揉めて〳〵……早く出樣と思ひまして子ー……琴平に懸ッた八日めでムりましたが、大分氣分が宜い樣でムりますから大丈夫だと思ひまして、久しく出ないとでもあるし今夜こそ一ッ出て演ッてやらうと久し振でお湯に行きますと又惡くなりまして子、さう〳〵二三日又苦みました、これも持たが病で仕方がムいません……オホヽヽ

彼は頻りに髀肉の嘆に堪へざるものゝ如くである、此時下婢茶を酌んで出る紫行は枕頭の薬物を開いて『サア一ッお摘みなさいまし』

△寄席で聞きますと湯治にでもお出でなさる樣な話しですが實際ですか

〇ハイ妾の家は群馬縣で、磯部の直ぐ近くに親戚がありますから、其處で暫く療治を致しませうかと考へて居ります、しかしまだ滊車にゆられると惡いと申しますから來月の十日頃でなくッちや何も參られますまいかと存して居ります

△今の内に押して無理に少し位演ッてまた直ぐ病らう樣ぢや却てつまりませんから矢張根底から充分に療治なさる方が宜いかと思はれます子

〇妾も左樣存じまして其樣にする積りでムりますが子、妾が休んで出ませんと……這回の琴平丈は文福が大將になッてどうかこうか演りましたが、みんな何うも他へ行ッて使はれるのが嫌だと申しまして子、來月は土浦といふ所へ參りますそうでムります

△ハヽア左樣ですか彼の文福さんといふのは去年頃から師匠さんの座に見える

樣ですが一体何處で御修業なすッた方なんですか

○彼はもと妾共へ參りましたもんで久しいこと勤めて居たもんでムりますが、姉が京都の方へ嫁付て居るもんですから一所に參りまして彼地で少ゝ許演ッたんださうでムります、それから東京へ參りますと五厘では彼の通りの手腕を持て居るんですけれども麻布だの深川だのッて場末でしか演らせて吳れません、ですからどうせ睦みの方へ引張ッても駄目だと思ひましたが、もと妾共で演ッたもんでもムりますし、一所にやらして吳れと賴まれたもんですから妾の前を演らせる樣にしましたが、彼んな確な腕なんで、ですから妾も大變いゝ人が見ッかつたと思ッて喜んで居ります

△左樣でせう僕等も餘程感服して居るんです、第一藝道熱心の樣ですから、彼れぢや上達する理です

○さうでムいますよ、さうも熱心がありませんと自己を捨てることができません、自己を捨てなければ眞物にはなれませんから……ですけれども自己を捨てると云ふとはなか〳〵難いもんでムいますよ、

△左樣でせうれ、自己が沒却することができれば道の眞髓を得るのは特り義太夫にのみ限りませんから、それができれば人間としても餘程豪いんですれ、あの素鶴さんといふのも餘程熱心の樣で文福さんとは好一對ですれ

○エイモウ彼の熱心と云つたら……近來では全然夢中です、文福とは恰度好夫婦でムいますよ、オホヽヽ

△成程さうでせう、聽て居ても心地が快ッて思はす乘出し度くなるんですもの、どうも彼んな風に演られると聽者も力が這入りますなア、それからあの素竹さんといふのは何處の方ですか、彼の方も近頃からの樣ですが……

○彼も東京のものでムいましてネ、失ッ張妾が敎へたもんでムんす、土浦へも同伴に參ります、彼も我儘もんですから師匠が出ないうちは休んでも他へ行くのが嫌だと申して居ります、二代目(三福を指す)丈は十日ばかり前からチヨイとした病氣で出て居りませんから這度も參りますまい……○それに子貴君、内のもの共は此頃の若い眞打を輕侮にしていけません……皆氣位ばかし高くッて困ッたもんでムります……オホヽヽ、妾が出ないと出る氣になりませぬ、ですから妾もなほのこと早く出たいんですよ

△さうでせうとも隨分くだらない奴が眞打をやッて居りますから子、誰たッて自分より以下の奴に使はるゝのば馬鹿々々しいから無理もないのです

○しかし子、世の中は妙なもんで、若くて顏が美いだけで藝の二の町なのが相當にお客樣があッてどうかこうか遣ッて居る所を見ると骨折ッて勉强するには及ばない樣なんですけれども、さうかと思ふと年老で妾共の樣なものにも來てくださるお客樣も相應にムいますし、分からないもんでござんすネー

△そりや世の中は盲目千人目明千人ですもの……でも何でせう自然客種に相違があるでせう、譬へは若くて顏の美麗な方には書生が多くッて眞正の耳を持ッた人は眞正に語る方に行くとか云ふ樣な工合に……

○夫はさうでムりますネ、妾共のお客樣は大抵四十以上の方が多うムいますし……ですから文福は聲が惡くッてもあの通りの藝であの熱心があッて已を捨てゝ一生懸命に演りますからお客樣は喜んで聽て被下ます、妾も追々は招牌でも揭けさせて遣りたいと思ッて居ります何と申しましても近來の二枚目では淸吉小染文福でムりますから子ー

△淸吉は死去ッたさうですネ

○死去りましたネー、惜いとをなしました

△小染ちゆうのは此節何うしましたか一向席へは出ない樣ですが

○大阪へ下ッて居るさうでムいますよ、招牌でも揭ける心算なんでせう

話頭一轉

△文福さんはスルト這度土浦へ行くんですネ、何う云ふもんですか知らん地方へ行ッてたゞ廣い芝居小屋なぞで演ッたら、聲を傷めやしませんか

○イエ、そんなとはありませんネ、廣い芝居小屋なんかで演る方が却て樂ですよ、ですから子地方から歸ッて來てすぐ席亭へ出ますと其當坐は聲が向うへ打衝かッて反て來る樣な氣がして語り難うムります

△成程さうかも知れんですネ、しかし聲と云ふものは幾ら使ッても關はないもんですか假令は掛持なんかして……

○イエ……そりやさうぢやありません、弱りますよー、鄙陋なお話なんで

すけれども月經中でもなんでも關はすお腹を〆まして子、聲を絞るもんですから大變に躰が弱るんです、妾なぞはそれは掛持をしたりしますもんですから尚さしも弱り升子

△僕等も實は非常に其とを憂ひて居るです、何うかして助たけはお廢しなさる譯に行かないのですい

○どうも參りませんネ、もど／＼自分が好なもんでムりますか行ッて演ッて來て遣らないと氣が濟みません

話頭更に一轉

△どう云ふもんでせう(自分も書生だけれども)此頃の書生連中が席に行くとよく、語る人と一所に拍子を取ッてサワリ抔の處では無暗に手を拍ッたり聲を懸けたりしますが、障害らんもんですか

○いけませんネー、障害りますとも、此方が一生懸命になッて居るときに傍でワイ／＼されると、何かこう……持ッて居たものでも失ッた樣な氣がして全然我に歸ッて了ッて、モウいけません、腹が立ちますよ、一度牛込の石本で斯う云ふとがムりました、其晩の語物は忠臣講釋でムります、所がどうも騷いで騷いで如何しても遺書を讀ませません…のですネ…腹が立ッたから妾が云ッてやりました『貴君方ばッかりお錢を出して聽きに來て下さるんではムりません外にお客樣がありますし若し素行の義太夫がお氣に入らないなら、聞ひませんん是から直ぐお歸りなすッて下さい』ッて高座から怒鳴りましたよー、すると樂屋でも驚きまして子何事が起ッたかと衆なが吃驚したんださうですよ、妾はモウ語ッて居る中は喜内なら喜内重太郞なら重太郞其曲中の人になッて了んですから、男の樣に氣が荒くなりまして子、自分の女だとも何も忘れて了ひます、ですから高座で腹でも立たうもんならモウ時々自分でもハット思ふ樣な甚ひとを演るんでムいますよ

謙遜はしながらもこゝ大氣焰である

△大に然りです、夫でなけりやいけません……僕等はマア師匠さんのは何でも聽たと云ふ譯でもないですけれども聽たうちで感服したのは、小坂部だとか中將姬とか酒屋忠臣講釋なんぞの樣ですが……

○忠臣講釋、彼はモウ妾も一番好きなんです、彼を演るときには何も彼も忘れて了ひます、無神經で演る時分には種々な曲を教はりましたから何でも語ッたんですけれども、此頃ぢや如何も明烏なんて彼樣な浮々した曲は耻しい樣な氣がして語られませんネー、ですから近來のお客樣のあんまりお氣に召さない樣なものが自分で好になりました

△こんどは一ッ宗玄庵室を聽たいと思ひますが

○彼曲は去年教はりました、綾瀨さんから、何うか一ッ演ッて見たいと思ひまして子、所が義太夫雜誌の先生から云はれました、彼曲は止したらいゝだらう、筋があまり良くないからッて……

△しかしさうでもありますまい、つまらない淺薄な茶滑の樣なものよりは彼樣な深刻なのもタマにはいゝでせう

○左樣でムります子ー

△演者がいくら巧くッても作があんまり下手とつまらないですネ、だから師匠さんの演るうちでも大江山なんて云ふものは感服し離るんです子

○彼曲はたゞモウ他が餘り語らないと云ふだけで彩りのために入れます……少し變りませんと子、近來の樣に玉藻前だの宿屋だの辨慶上使柳なんて子ーあんまり此處でも彼處でも演る樣なもん計りぢや面白かアありませんから子、

△岸の姬松なんかもつまりませんなア

○さうでムりますか子……それに此節ぢや語物が無茶でムりますヨ、妾共が習ひます分時にはチャント口は口、中は中、眞は眞で語る所が定まッて居まして子、先代萩なら竹の間の政岡が鳥籠を持ッて出て來る所から子供が語り、跡見送ッて政岡がからは大人のもんでムりますた、それを此頃では大人の語る樣な大きなものを子供が語るやら全然區別がありませぬ、それも畢竟はお師匠さんが若いからなんですよ、自分が三日太平記を語るとを覺ゆれは直ぐそれを弟子に教へると云ふ樣な譯で、謂はばいろはを習はないで直に四角い字を讀む氣になる樣なもんで、あれぢや間違ッて居るかと思ひますけれども……

此時來客あり、狹き所に長居は餘り察しなきに似たれば

△お暇にします、どうも突然參ッてえらい失禮致しました……

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○左樣で厶りますか、どうかまたチヨイ〳〵お遊びに入らすッて被下いまし
△左樣なら御大事になさい……どうぞ其儘で
○難有う厶ります、左樣なら立ちませんから……失禮で厶りますが御免下さい

僕は談話の途中彼を疲勞せしめんとを恐れたから『宜いんですかこんなに長話しをして御病躰に障りやしませぬか』と問ふた、すると彼の云ふのには『イエモウ決して……今日は氣分も宜ふ厶いますし……自分の好なお話なんですから……』と彼は果して三昧に入て居るものである。

一躰藝人なんて云ふものは高座でいくら立派な奴でも美人でも、一度其居坐を崩した樂屋を覗いたら、どんなに惚れて居ても直に愛想が盡きて了ふものだと云ふ話もあるから矢ッ張高坐で見て居る方が宜いのかと思ッた、けれども今素行に會ふて見ると嘗に愛想が盡きないのみではなく、却て益々奥床しく何時までも話をして居たい樣な氣心が起る。古い奴だが世に卑き職業なし卑き人物あるのみ、歟、彼女は勿論藝人ではあるが平凡の藝人でない、兎に角、一藝一道に徹底したものは、どうしても俗流に超絕した品性を持ッて居る。彼女は談話中始終愛想よく、能く笑ひ能く話ッた、されど決して取り亂して下郎た容などはしない、以て彼女の素行を窺ふべしだ。

（をはり）

農夫

（中學生のため）

白水郎稿

一人の農夫　朝まだき
深き野露を　拂ひつゝ
鍬を肩にし　佇めば
さも元氣よき　小雲雀の
朝日に聲を　あぐるなり
雲雀よなれは　何時もいつ
なにする爲の　歌なるぞ。
農夫の問へば　小雲雀は
我等が日々の　生活を
護れる神に　感謝して
この日の門出　祝するは
之ぞわれらの　家風にて
遠つ祖の　定めてし
我等が世々の　家法なる
いざ君ともに　謠はずや。
雲雀はかくも　いらへつゝ
復しも聲を　はりあげて
御空に高く　あがりけり
哀れ農夫は　いま更に
雲雀のとぶを　見やりつゝ
くわに力を　ふるふなり
鍬にちからを　振ふなり。

○個々銘々の天の使

慈愛深き天の上帝と、頑是なき地の人間との間だに、天の御使ひと云ふものありて、上に登り、下に降り、翩翻蹁躚して聖旨を齎らすてふ信念を起せるは、殊勝にして麗潔なる想像より發す。如何にも神々しき美の歎念の認たむる所なるかな。而して、天使無數にして、夫々の人の周圍を取まき、之を激勵するものあり、慰撫するものあり、啓導するものあり、訓諭するものあり、無形に百方の靈動を盡くして、天父慈愛の御心を達せばやと勞苦す。保育擁護の惠み、感謝に堪へざることと思はんは、信念堅固、歴々として此の狀態を心に感悟することを爲せばなり。昔し、主基督、嬰兒を輕んずまじき由を徒弟に訓するとき、必らずしも、其の靈性の重んずべき由を論じ玉はず、必らずしも、其の將來の價値ある所以を示し玉はず。凡そ此般の理義道德に訴ふることの迂回をせずして、直ちに先づ、天父慈愛の動く所ろに指さして曰く、

爾等、この小子の一人をも愼しみて輕視するなかれ。我、なんぢらに告ん。彼等が天の使は、天にありて、天に在す吾父の面を常に覿ればなり(馬太、十八、十)と。

見よ。茲に父母一人の愛子を擧げたりとせん。其の慈しみ、如何斗りぞ。彼等が夢も、幻も、晝も、夜も、物語りも、事業も、すべて其の愛子を思ふの情に結ばざることなけん。誰か能く此の慈愛を述べ盡すことを得んや。偶たま、此子、晝、眠れりとせん。スヤ〳〵として寢ね、微笑して夢む。母にそひねの夢か、蝶よ花よの夢か。此時、父母其の左右に護りて、息を細くして窺がふ。氣息高くして夢を驚かせじと掛念し、聲を發して眠りを覺すことあらじと憂ふ。此時、此の情、父母相見て亦た其の子の顏を見、其子の顏を見て亦た互ひに相見る。默したる口の邊りに言ひがたき欣喜あり、たゞ遂に眼をうるませて互ひに泣かんとするの感謝あるのみ。之を「伏せる吾子の顏を常に觀れば也」と云ふ。主基督、天父が人を慈くしみ玉ふ御心を知りて審らかに此般親ごゝろの情懷を盡し玉へり。則わち、徒弟に命じて、一個の小子をも輕んずる勿

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

れど教へ彼等を擁護しつゝある天の使は、天にありて、天に在す吾父の顔を常に觀ればなりと言ひ玉ふ。吾主基督の信念の彌や高き上に高く、濃かなる上にも濃やかき御有樣の一端ぞ窺われ得べし。而て、主基督、天下に道を傳えて、平和を全世界に出さんと爲し玉ふ動機の第一は、天父に斯の御心ありて、一個の小子の亡ぶるすら、如何に痛く其御思を難ますやらんと思し玉へば也。故に此時引續て弟子に訓し玉ふらく、爾曹いかに思ふや、人もし百匹の羊あらんに、其一匹迷はば九十九を山に置きて迷ひし一を尋ねざる乎。若したずねて之に遇はゞ我眞とに爾曹に告ん、迷はざる九十九の者よりも尙ほ其一を喜ばん　是の如く、この小子の一人の亡ぶるは、天に在す爾曹が父の聖旨にあらず。

嗚呼、吾主基督の傳敎の主旨は、今の法敎師の慷慨する所ろと太甚しく違へり。孝子は、父の心を痛めざらんとて、其の同胞に對して悌なり。惟ふに、基督は深く親心を知ろし召しけりし。曾ては放蕩息子の一例をあげて、其父が墮落せる弟と、勤勉なる兄とに對する二樣の情愛を較べ、言ひ難き親の愛を仔細に顯はし玉へり。神を天の父と言ふは眞に基督より

初まる。斯の如き信念を傳へ玉ふは、實に基督より初まる。

○大山獨聳、大谷獨潜

大山は獨り聳え、大谷は獨り潜む。孤獨寂寥の情感よりして自から念はば、豈に伴侶なきの無聊に堪ゆることを得んや。但だ夫れ一家、父あり母ありて互ひに慰さむ、たとひもし其の一を欠くことありとも、之に可憐の兒孫あらば、亦た自から慰さむるに足らずや。兒孫もと老親の伴侶にあらずとするも、之を慈しむものは、之によりて能く慰さむることを得んなり。惟んみるに、古よりの偉人、卓然として通俗を拔き、識見と感想とに於て、當代に伴侶を得ず、大觀することあるも、情話することなく、悟達することあるも、傾盡することなく、一生はた何等の面白き快談を盡すことも得ざりし折りや如何なりけん。彼等は但だ兒孫を慈くしむの情をもて世に對し、以て自から慰さめんとはせしならめ。盛んなる哉、功名の人、それ何ものと競はんとするや、卿は尙ほ競ふべき輩あるによりて、心や勇むらん。盛んなる哉、慷慨の人、それ何ものを責めんとするや、卿は尙ほ責むべき族あるによりて、心や躍るらん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

之と競ひ、之を責む、心の若々しさよ。何んぞ其の面白氣なる。憫れむべしや、敵愾蠻勇なきの人、もし獨り居らば、孤然、膝を抱いて天に嘯ふく耳。客來りて、慨然として語るあらば、微笑して之を聽んとする耳。もし世の疾苦を見、世の叫喚を聞かば、兒孫の井に陷いらんとするの急に接する如けん耳。但だ即わち之のみ、即わち只だ其兒孫と語る。兒孫喃々として其遊戲を誇り、時に爭つて相搏つ。老親の眼中一光一涙ある者、奈何ぞ、所謂る名士の感慨と等しからん。

○聖なる秘め事

人の胸裏に彈機あり、思ふと言はではやみがたきほどの心地せしめ、自づからに之を彈發せしむ。或る時は、獨り物言ひて此の情を漏らし、或る時は、獨り物書きて此の情を寫す。物言ひて其聲の氣空に埋もれんことを欲し、物書きて忽まち其紙を破り棄つるほどならば、初めより若せざるにひとしからずやなど論らはん人の抑も淺々しき哉。抑そも人、斯の如く打あけたき心のありと雖も、亦必らず打ひそめたき心のあるあり。もとより神に恥る者ならずして、人くさき人には告げがたく、固たく唇頭を結んで、情懷に封じ、斷じて言はじと思ふ心根に、義と勇と、愛とを凝めて、自から守らん時ぞ、實にや念ひの淸々しからめ。胸頭爽やかに、腹底重もく、神聖なる秘め事を自から味はひて、ほゝえみて樂しむ。天地悠々たり、人界ひとり騷ぐ、草露、情けあり、土泥ひとり黑し。言わぬに樂しみある秘め事を懷く人こそ慶こびなれ。

○大哲學者は學者にてあらじ

哲學者なりとの名をうたはれて、一むきに學理に耽りしものゝ樣に後の世より想はれんは、さすがに殘り惜しきことなるべし。凡そ、人の偉大ならんものは、超俗、染俗の二つを合せ、一面は世すて人の如く、他面は世に溺れし人の如く見ゆるを例とす。乃はち其の一面を窺がひて、たゞ絶待の純理に攻究し、敢て世の實際に關わることをせざりし樣に思はんは、識見の未だ到徹せざる證しと認とむ。實際とは卑事にあらず、國民發育の生命、事に接して流露するの場なり。苟しくも人其の天稟を發らきて、卓拔なる進歩を遂げたらんものにして、何んぞ當代の生命と相關せざるほどの疎濶あらんや。其の靈

感は斯あるを許さず、其の慈心は斯あるを許さず、必らずや如何んかの交通によりて、其の消息と相結ぶの緣しなくんばあらじ。彼哲學者即はち此の生命と觸れて、深邃の思想を吐露し、以て一代を啓發す。後人たゞ之に哲學者の名を寄せて、寧ろ冷々たる一個の學者先生となし了せんとするは、則はち未だ此の秘密を知らざれば也。此の意義に於て、彼は實に思想的豫言者なり、たゞ所謂ゆる學者にはあらじ。此の意義に於て、一世の歌よみは、美的豫言者なり。此の意義に於て、一代の君子人は、道の豫言者なり。已れは、すべて後人の命名する所ろ、太はだ其の當を得ざるを惜しむ。命名尙ほ可なり、以て其の誤謬の理想を形ちづくるに至ては、深く戒しめずんばある可らざる也。

○蝶よ、花よ

ダルヰンの母は、傍眠の夜具に動植の摸樣を染め、其の祖父は、庭の遊びに、木の動物に似たる樣を說聽せぬ。我國の古人、子を愛するの親に告げて曰く、「蝶よ、花よと、守り育てて」と。庭訓、博物の智識を與ふ可き主旨を歌へる也。

時事

○加藤とし子逝く

四谷角筈村の女子獨立學校長加藤とし子、去月二十七日長逝す。君老年志を決して京に出で、幼兒の如く學び、後ち奮つて女子獨立學校を起す。設備、經營、維持、悉皆其の老肩に荷ふて、十年苦心一夕も休めず。一英語を解するなくして平然米國に渡り、校規振張を計るに至る。純潔强剛の志望未だ其半を達せずして早く長逝し、永く同人をして遺恨禁ずる能はざらしむと雖とも、精靈亡せず、遺愛の女生の上にあり。惟ふに其の所志は決して貫ぬかずして止まじ。吾人の如きは、深く之を惜しむとともに、亦切に之を信ずるもの也。

○松田道子歸朝

米國婦人奬學資金の委員に推撰せられ、其第一回留學生として、去廿六年七月米國に渡り、プリンモア女子大學に入學して、本年定科を卒え、去六月八日に催されたる同校第十四回卒業式に於て、バッチエロル、ヲブ、アーツ(技藝得業學士)の學位を得たる松田道子女史は、去二日恙なく歸着せり。同女史が内外に負ふ所ろ太はだ重し、吾人は其の健在にして淸高ならんことを祈る。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

片々

◎福翁の女子論と日本主義福翁　一度女大學評論を時事新報に掲げ初むるや、世論喧囂今に於て息まず、吾人は餘りに歐洲の外形のみを買ひ被ぶりたる論議を贊するものに非ずと雖、兎に角我國民が婦人に對する謬想を說破するところ、之を風教の上に見て其効果の大なるを認めずんばあらず、日本主義一輩の徒、頃者頻りに之を以て愚昧淺薄の有害なる婦人論なりとして罵詈す、これ豈國民を擧げて一牡百牝の海瀨たらしめんとする汝輩日本主義の徒が喙を容るべき問題ならんや、（中央公論、第十四年第六號）

◎女子大學　吾人は東洋文明の半途にして其進歩を中止したるを以て、少なくも女子教育を無用視したる、實に其一因をなしたらんとを思ふ。（人民、七月一日）

◎女囚　東京鍛冶橋監獄署に於る最近調査の統計により女囚の增減を見る。

囚人千人に付女入監比例

十四年	二〇	二十年	四九	廿六年	一一六
十五年	三六	廿一年	四一	廿七年	一二五
十六年	五四	廿二年	一〇八	廿八年	一一〇
十七年	五二	廿三年	一四二	廿九年	一一三
十八年	五五	廿四年	一一六	三十年	七三
十九年	三七	廿五年	一四二	卅一年	六五

◎外交官と夫人　在外公使を選任するに當りては先づ其の夫人の素性を糺すの要殊に暹羅國の如きは種族階級の最も喧ましき處若し彼の怪しき素性の夫人を携へ行く如きとあらんには其夫人は宮中に入ることを許されず延て公使其人の信任を傷くるに至らん（千代田日報、六、廿九日）

◎高等女學校の國庫補助法を立つべし　教育時論曰く、其金額は多きとを要せず、專任校長の俸給額位の見積とし、設備の緒に就きたる學校に、各府縣一校づゝ、一定の年限間補助するとさせば、數年間僅に年額三四萬圓づゝを支出して事足るべし（六月五日）教育報知又曰く、高等女學校は日本現時の女子最高等教育堂なり、國庫は宜しく其費用を自ら負ふべし（六月十四日）。

◎男子の好きな女子教育　我國の婦人を優美溫雅にのみ仕立つる教育論には贊成する能はず、優美教育論は寧ろ男子の手前勝手の論と云ふべし（山陰新聞、六、二十七）

一覧要目

◎女學校巡り（東京府高等女學校六月四日。東京女學館六月四日。跡見女學校六月廿八。和洋裁縫女學院六月廿五。帝國婦人協會七月四日。）　千代田日報（六日）

◎令孃鑑（高田綾子六月三日。稻葉音子六月二十。毛利萬子六月廿三。阿部令子六月廿八。嵯峨淑子六月廿九。堀爵子六月二日）　千代田日報（六日）

◎佛教仁慈女學院（大澤天仙）　讀賣新聞（六月二、三）

◎一步を退くべし（男子先づ一步を女に讓るべし）　時事新報（六、廿六）

◎夫人の素顏（鍋島榮子六月廿三日。毛利安子七月四日。）　報知新聞

◎女生徒の袴着用に付て（上田の一養女、投書）　信濃每日新聞（六、十八）

◎男女の學說（女人は惡人なるか）　時事新報（六、十八）

◎藝妓の弗術　萬朝報（六。十九より連載）

◎各國女傑叢話　東京朝日新聞（連載）

◎女工の風儀　都新聞（六。二十四）

◎音樂談（日本音樂會と明治音樂會）　讀賣新聞（六。二十六）

◎躰操及躰格檢査を嫌へる女生徒に告ぐ　讀賣新聞　六。廿四 六。廿五

◎昔の女學校（開拓女學校）　救濟新報（六。十）

◎田口鼎軒の母と姉と父　經濟雜誌（五、廿七 六、十）

◎社會の制裁と婦女　日本人（六月二十日）

◎故星野愛子の略歷　救濟新報（六、二十五）

◎遊廓地を變更せよ　台灣（五月六日）

◎女子大學　人民（七月一日）

◎女子の服裝　中央新聞（七月二日）

◎婦人問題　山陰新聞（六月二十七日）

◎習弊慣習にあり（烈婦姪婦になるの記事に付て）　報知新聞（六、二十）

◎善美なる家庭組織　時事新報（七。四）

◎憐われなる女工　人民（七月五日）

◎女尊男卑の眞相　京華日報（七月四、五日

時報

●大日本婦人聯合會　婦人平和會は意外に多數の同盟者を得て趣意書名簿等を和蘭國海牙府なる萬國婦人平和會本部に郵送せり。縦ひて右發起人諸子は去十九日華族女學校に集會し右等の報告をなしたる上、尚ほ將來日本婦人の地位を高かむべき公共問題に關し互に氣脈を通じ攻究する爲め大日本婦人聯合會と命名して之を繼續すべきことに决し會則起草委員を選みしに鳩山春子、濱尾作子、潮田千勢子、山脇房子、松本荻江、三輪田眞佐子、下田歌子の七氏當選せり。

●東京夏季講習會　東京府教育會は府下小學校女教員の爲め七月廿七日より翌月十六日まで三週間間夏季講習會を開き音樂附遊戯法（小山作之助）禮法（後閑菊野）（裁縫教授法（谷田部順）數學（原田長松）の講習を爲す由

●神戸女學院　第十六回卒業式、去廿八日執行。卒業生、高等科（山家悦）普通科（本多鶴代、田邊袛、藤井幸、雨夜小卷、裁縫專修科（岩井熙）

●同志社女學校　第廿二回卒業式、去七日執行。卒業生、專門文學科（磯谷榮、中野務、末弘季）普通科（野口鶴、末光久、田中友枝）

●品川婦人教會　七月二日創立發會せり。

●裁縫講習會　江州犬上郡私立教育會は郡內各小學校の裁縫教師を集め、夏季講習會を開く。三週間。六十八人生徒。教師は熊本尙絅女學校の職員。

●大阪調理改良會　去四日南地明月樓に於て第十三回大阪調理改良會（當番南部）を開く當日は京都の調理會員も來會せり。課題は月名所にて第一席待合、（三笠山の春の月）第二席抹茶席（石山の夏の月）第三席は調理の本席にして獻立は汁（奥州松島の月）向附へ（須磨の月）煮物（玉川の月）飯（宇治の月）香の物（住吉の月）引肴、嵐山の月）八寸（田舍の月）吸物（姨捨の月）强肴（武藏野の月）眅肴（朝妻船の月）等にて尙ほ種々の餘興もありし（通信）

●京都調理會　去廿八日京都俱樂部に於て同會第三十五回を催ほせり調理課題は源氏物語にて座付、本席の獻立ては桐壺、空蟬、花宴、竹川、葵、須磨、薄雲、寄生、若紫、夢浮橋に因み器物も總て新調したるなど中々好趣向にて大阪の會員岸松館、堺卯樓主人を始め十名餘參會せり（通信）

●小樽婦人美風奬勵會　其創立五週年の祝會、去廿八日催ふさる。

●本瑞婦人教會　去廿八日其創立一週年會を催し、福井市內の貧民八十名に各白米二升宛を施與したり。

●「日本のお梅さん」（"Miss Ume of Japan"）と題する小說を出版し米國の文學界を驚ろかせしは、高橋琴子にて、廿一年前橫濱に生れ、八歲米國に渡りし女秀才なり。

●功徳協會　伊豫宇和島の同會は役員を改撰し、武田てる子主事となる、會員目下八十餘名。

●裁縫教師乏し　の歎聲、伊豫の國伊豫郡地方に高し。

●秋田婦人教會　去十日例會あり、武田知事の夫人會長に後藤書記官の令閨副會長となられる。

●廣島婦人慈惠會　本年一月より開きし同會は、會長を山田十軒翁の夫人に委せり。

●貧家の良妻　千葉縣千葉郡檢見川町稻毛七百卅四番地川源藏の妻に對し

川島まち

右資性溫良能く病夫に事へ晝は他の傭役に就きて醫藥及生計の資を辨じ夜は病床に侍して看護扶掖至らざるなく其夫の歿する迄二十年一日の如し其貞操洵に婦女の龜鑑とす依て金五圓を賜ひ其善行を賞す

明治卅二年六月二十日

千葉縣知事從四位勳五等　阿部浩

●桂花閣桂花翁逝く　俳壇の一奇人として其名高き桂花閣桂花翁事日本橋區室町三丁目五番地幸島市右衞門は豫て胃病に罹り療養中なりしが一昨日午前八時三十分遂に逝けり享年七十なりしと云ふ今其履歷と逸事を記せば翁は遠州日坂の產にして幼名庄助と呼び十二歲の時江戶に出で親戚なる小網町四丁目若荷屋方へ商法見習の爲め身を寄せ其後親戚なる室町三丁目通稱大算盤事大坂屋幸島市右衞門の養子となり其家督を繼いで今の名に改めたり翁又曙山人と號し若年より一大歷史を編集せんと企圖し其材料を集むるには高貴の人に交るに若すとてそれがために國學を學び斯道を以て交らんとし正風の俳諧にて一家を起し遂に當時の寺社奉行に取入りて大に材料を得漸次に古書を獵りて國常立尊より明治三年三月迄までの歷史を日記樣に編纂し號けて「沿革雜誌」と云ひ七百卷の大部なるが本年漸やく編纂を了り去る三月十一日製本出來の祝ひをなし來る十月二日には古稀の祝宴を開く筈なりしと云ふ右沿革雜誌は畏き邊りにて買上んとの仰せありしも翁は固く之を辭し子息に遺言して我死後五ヶ年を經ざる內は何人にも見せぬ事を許さず深く秘藏せよと命じたる由尙此他にも遺言して翁の養母今尙存生中なれば葬儀も秘して假葬となし養母の死後に至りて世間へ發表し本葬を出すべしとの注意をなしたる故同家にては其喪を秘して今回は假葬のみに止むる由なり其寺は築地本願寺なりと云ふ（六月八日萬朝報）

副島蒼海老伯題字　堀田小倉山人著
夏季女子

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

副島蒼海老伯爵題字　堀田小倉山人著

新刊

家庭の鑑

菊版美本全一冊定價金拾八錢郵稅四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き讀むものをして々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の模範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の冊子を備へざる可らず

教科用並參考用圖書

發行所　東京市京橋區築地二丁目卅一番地　國光社　（電話新橋八八）

夏季女子講習會開設廣告

今般本會ニ於テ教員タル必須ノ學力ヲ補充シ兼テ一般女子ノ爲メ適實ナル科目ヲ講習セシムルノ目的ヲ以テ本年七月二十七日ヨリ仝八月十六日マテ夏季女子講習會ヲ開ク講習志望者ハ科目及族籍、住所、氏名、生年月ヲ記シタル書面（用紙半紙）ヲ本年七月十四日マテニ東京市神田區一ツ橋通二十一番地東京府教育會事務所ヘ差出サルベシ

講習科目及講師

音樂（附遊戲） 講師　東京音樂學校教授　小山作之助君

作法　講師　女子高等師範學校教諭　後閑菊野君

裁縫教授法　講師　女子高等師範學校囑託教師　谷田部じゆん君

（注意）裁縫教授法ハ今年新ニ聽講スルモノニモ昨年既ニ聽講セシモノニモ適當ナラシムル見込ナリ

數學　講師　東京府高等女學校教諭　原田長松君

講習料（本會々員ハ二割ヲ減ス）一科目金壹圓二科目金壹圓五拾錢三科目以上金貳圓

證明書　講習結了後證明書ヲ授與ス

科外講演　時々大家ヲ聘シ女子ノ心得ニ關スル科外講演ヲ開ク

明治卅二年六月　東京府教育會

海軍軍令部長子爵伊東祐亨君題辭　海軍大將　水路部長　肝付兼行君序文　海軍少將　勝田　泰東　編輯

大日本軍艦帖

六月十日寫眞銅版菊版本

定價金四拾五錢郵稅六錢●郵便切手代用一割增

帝國は世界無二の海國にして海國的に發達せしむる之れ自然なり今や海事思想の普及せざるべからざるを天下の輿論となり海軍は常に擴張せられつゝあり されど將來世界海上の權を掌握して國威を宣揚し國利を增進せしめんには更に大に擴張せざるべからざるべからず

本書は最初に簡明なる帝國海軍小史、海軍の職務、軍艦の類別及帝國軍艦表を記載し次に我國現時の新舊軍艦を各鮮明なる寫眞銅版に寫し各艦に就きて簡易なる說明、小歷史及各艦特有の逸事を附記し讀者をして閱覽の間に自ら趣味を覺えしむ

之を聞く海王國として世界に雄飛する英國人は男女老少殆んど其軍艦帖を所持せざる者なく非常に之を珍重すと、將來東洋の大海國として卓立せざるべからざる吾國民は宜しく一本を坐右に備へ以て帝國海軍の形勢を知り奮起する所なかるべからず又各學校の參考書、生徒の賞品には至極適當なり

爲替は飯田町支局　發行所　東京市麴町區富士見町六丁目十番地　東光社

大賣捌所　東京堂　上田屋　教文館　東海信文合資會社　北隆館

明治二十五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY